

# 紅

京都大学広報誌  
くれなるもゆる

# 萌



②

巻頭対談

遊んで、悩んで、ことばに沈む  
現実と虚構に生きる  
作家という仕事とその日々

いしいしんじ+青羽 悠 進行●廣野由美子

⑦

追憶の京大追違

京大ならではの、ポップな頭脳集団だった  
川下大洋

⑧

授業に潜入！ おもしろ学問

リーダーの条件は自分と  
他者の〈こころ〉を知ること  
河合江理子+河合美宏

⑫

恩師を語る

戦後日本を鋭く見つめた先覚者 高坂正堯  
潜れども潜れども叡智は深く  
中西 寛

⑮

京都大学をささえる人びと

24時間365日、  
集まり続ける地震データを整理  
澤田麻沙代

⑮

萌芽のきらめき・結実のとき

「怪異」の跋扈する社会のしたたかな人びと  
高谷知佳  
100年後の人類に役立つ可能性を  
秘めた、龐大な標本を次世代へ  
西川完途

⑳

輝け！ 京大スピリット

男子ラクロス部/民族舞踊研究会/村津 蘭

㉒

まなび遊山

もの言わぬモノが語りだす  
「秘めたる美学」の物語

㉔

触発ギャラリー

表紙の解説●

モノ語る京大の歴史

石英(日本式双晶)総合博物館蔵  
総合博物館は京都帝国大学時代  
から集められた2万点以上の鉱物  
標本を収蔵。その中でも、1万点を  
超える「比企鉱物標本」は、現代で  
は入手できない日本最高峰の鉱物コレクション。工学  
部採鉱冶金学科の教授であった比企忠(ひき・ただす、  
1866-1927)が蒐集した。表紙の石英は、二つの石英結  
晶(水晶)が接合した双晶の一つ「日本式双晶」。大型で、  
左右の結晶のバランスが秀逸な一品。背景に使用した  
比企が記したノートは、標本の保管方法や、入手経緯が  
細かく記された「バイブル」である。



# 遊んで、悩んで、ことばに沈む

現実と虚構に生きる作家という仕事とその日々

「ぼくはあつちがわにぐいとひきよせられる。でもね、かくんだよ。ぼくはかくの、あしをふんばって。おねえちゃんのわらい、こえをきくためにね。おねえちゃんのこえはこつちがわにある。…」

いしいしんじ『ぶらんこ乗り』(理論社、2000年)から抜粋

二〇〇〇年の『ぶらんこ乗り』での長編小説デビュー以降、自身の率直なイメージをみずみずしく書き綴るいしいしんじさん。高校二年生で書いた『星に願いを、そして手を。』で小説すばる新人賞を最年少受賞した青羽悠さん。作家たちは、生きることの喜びや悲しみ、不安など、かたちにならない感情や時間の流れを「物語」としてかたどる。はたしてそれは、自分のためか、それとも人に読んでもらうためか。対話を通して見えてきたのは、意外にも、二人のカラツとした生きざま。物語とたわむれ、楽しむ二人のことは、人生はもつとおもしろいのだ、と私たちに教えてくれるようだ。

廣野●いしいさんの初期の小説には、何かに取り憑かれて生きている人が登場する作品が多いですね。『トリツカレ男』は題名どおり、何にでも取り憑かれてしまふ人が主人公です。いしいさんご自身の生き方もそういうものですか。(笑)

いしい●振り返ると、ぼくが書いたものには、たしかにそのときに自身が置かれていた状況が表れています。最初の三冊(『ぶらんこ乗り』、『トリツカレ男』、『麦ふみクーツエ』)を書いた二年間は自室に引きこもって、まさに取り憑かれたかのように書いていました。しかも、『トリツカレ男』の執筆時は恋愛にも取り憑かれていて、大恋愛中やった。(笑)

そういう自分を意識して書いていたのではなくて、時間がたつてから、「あんときは、ああやったな」。今は自分の生き方と小説の世界との距離はほどほどにとれていますが、自身の姿が今の小説にどう



ゲスト  
**いしいしんじ**  
作家  
1989年文学部卒業

ゲスト  
**青羽 悠**

総合人間学部2 回生

進行  
**廣野由美子**

人間・環境学研究科/  
国際高等教育院 教授

あの銀色に光るドームの中でな  
ら、僕はどこまでも行けた。月  
へも、太陽へも、この太陽系の外  
きつとカシオペア座にだって。  
何が変わってしまったんだろう。

青羽 悠『星に願いを、そして手。』(集英社、2017年)から抜粋

反映されるかはわかりませんね。(笑)  
**青羽** ●「取り憑かれて書いた」という感覚は、とてもしつくりきます。ほくも「どうして小説を書き始めたの」とよく聞かれますが、「書くしかないと思った」としか言えないです。  
一六歳で書いた『星に願いを、そして手。』の中で、自分と小説との距離はゼロでした。当時は、自分の「夢」が何かわからず、決められなかった。そして、いざ夢が見つかって、夢が叶わなければ辛いだろうし、叶ってしまえば宙ぶらりんになってしまうかもしれない。とにかく不安でした。一方で「何かをしなれば」という焦りのようなものを自分で持て余していました。だから「夢というものについて、抱えるであろうことは全て書いてしまおう」と書き始めた。  
**廣野** ●青羽さんの新鮮な作品には、冒頭部から技巧性に惹きつけられました。語り手は一人称ですが「僕」(私)、「俺」の三

人が入れ替わる。一つのことを多元的に捉える手法ですね。構想に時間がかかったのではないのでしょうか。  
**青羽** ●ベースは一月ほどで書きあげました。三方向からものごとを見たとは思って、その挑戦がああ形式に……。  
**いしい** ●読んでみると、「ああしか書けない」という感じがしますよ。書きたいことが一番伝わる方法を考え、ひらめいた構造がこれだった。一六歳だからこそ、軽々と計画を超えて、ビヤツとつかめた瞬間があったのだろうと。

**経験こそが、  
血の通った文章につながる**

**廣野** ●いしいさんの作品はリアリズムのしびりがなくて、大人のメルヘンというような感じがしました。擬音語や擬態語もおもしろくて、独特のユーモアがある。  
**いしい** ●「自分はこの物語を書いている」という自覚はないのです。自分が作家だという意識もないのです。最初の長編作『ぶらんこ乗り』は、ぼくが四歳半の頃に書いた「たいふう」という話のノートを実家で見つけたから。それまではライターとして旅日記や評論、短編小説などを書いていて、当時は「自分はなんでも書ける」と思いあがっていたくらい。  
でも、二〇年ほど前、三四歳の頃に心と体を壊して実家に帰ったときに、「たいふう」を見つけた。これに比べると、これまで書いてきたものはまったくダメだと思えましたね。

**青羽** ●ライター時代には、プロ意識はあったのですか。





### いしい・しんじ

1966年、大阪市に生まれる。京都大学文学部仏文学科を卒業。2000年に『ぶらんこ乗り』で長編小説デビュー。2003年に『麦ふみクーツェ』で坪田譲治文学賞。2012年、『ある一日』で織田作之助賞、2016年『悪声』で河合隼雄物語賞を受賞。その他、『トリツカレ男』、『ポーの話』など、著書は多数。

### あおば・ゆう(ペンネーム)

2000年、愛知県に生まれる。高校在学中の2016年、『星に願いを、そして手を』で第29回小説すばる新人賞を受賞し、デビュー。同賞の最年少受賞記録を更新した。

### ひろの・ゆみこ

1958年、大阪府に生まれる。京都大学文学部独文科卒業。英文学に転向後、神戸大学大学院化学研究科博士課程、学術博士。山口大学教育、学部助教授、京都大学総合人間学部助教授をへて、現職。文部科学省科学官。イギリス小説を専攻。著書に、『批評理論入門—「フランケンシュタイン」解剖講義』他多数。

**いしい** ● 求められる以上のものを書こう

とは思っていましたが、振り返れば注文されたものを提出していただけ。自分の内側から出てくる（よくわからないもの）を出すことはほとんどなかった。

「たいふう」は、生きてきた自分の三四年間で唯一、（よくわからないもの）を出していた。世界と自分との間にある（埋まらない溝）と向きあい、一所懸命にこゝとばで埋めようとしていた。今もまだこれを続けているだけで、新しい表現を切り拓いている感覚はありません。

**廣野** ● 四歳半の自分が原点なのですね。

**いしい** ● 四歳半の「いしいしんじくん」に顔向けできないものは書きたくない。

**廣野** ● 青羽さんの小説は、ミステリー性がありますね。「フェンスが一部くぼんでいる」という描写が繰り返して出てきて、きつとなにかありそうだと、ドキッとさせられる。

**青羽** ● ぼくは「贅沢な読み手」で、作者が読み進める手助けをしてくれる物語でない、なかなか読み進められない。だから、自身が書くなら、最後まで読み手を飽きさせないだけのエンジンを積まなきゃ、と。自分がおもしろいと思うものを考えるうちに、こういう作風になった。

でも、読み手や観客を意識しているかというのと、「そんなものは背負いたくない」というのが本音。（笑）

でも、自分と距離をおいた物語を書くことを、今ではじめて意識しています。フィクションを書いていて実感はありますが、どうしても自分から逃れられない。

**いしい** ● きつと出てきてしまうと思えますよ。イアン・マキューアンというイギリスの作家にしても、テーマは多彩ですが最後は、「おまえたちはこう思っているが、人間の本当の姿はこれだ」と突きつけてくる。いろいろと書くこととしても、そうとしか書けない。狙ってできることではないのです。

**青羽** ● そのようにして自分の型が生まれてくるのですね。

**廣野** ● いしいさんの『麦ふみクーツェ』では、楽団の風景がよく描けていますね。いしいさん自身も音楽をされていたのでしょうか。  
**いしい** ● 楽器も絵もやって、手下だから小説を書いているようなものです。（笑）

**廣野** ● 音に満ちているうえに、視覚的なイメージも強烈。『ぶらんこ乗り』からはシャガールの絵が浮かんでくるようでしたが……。

**いしい** ● シャガールはめっちゃ好きですね。書いているときは考えもみませんが、自分が強烈に好きなものは詰め込んでしまう。

**青羽** ● ぼくは宇宙や星が好きで、『星に願いを、そして手を』の舞台はおのずと、科学館になりました。

**いしい** ● 意識せずとも、自分の体験が後を追って表れてきますよ。

ぼくは、京都大学に入る前に芸術大学

の試験に落ちて、高校卒でデザイン事務所に入ったのです。楽しく働いていたのですが、ある日、社長さんに言われました。「きみ、この暮らしを続けていたら、間違いなく道端で野たれ死にするぞ。二〇歳も年上の人が真剣にそう言う。「普通の大学に行きなさい。絵がうまい奴が書くサーフィンの絵よりも、サーフィンの経験のある奴の絵のほうが一〇〇万倍くらいええのができる。そういうもんなんや」って。

**廣野** ● それで京都大学に入学したのですか。

**いしい** ● その社長は、京大のiPS細胞研究所のロゴマークを作った人で、三年前まで京都大学の客員教授をされていた奥村昭夫さん。巡り合わせだなと。

**廣野** ● いしいさんの文章には、細かな部分に「この世界を知っている人だ」と思わせる質感のようなものがしっかりとあります。

**青羽** ● ぼくも今、音楽の話を書いています。音楽を作るのも好きなんです。いしいさんは、なんでもやりたいという気持ちは強くありませんか。

**いしい** ● そうです、本当にあります。

### 読んでもらうために書くのか、自分のために書くのか

**いしい** ● ぼくは、自分の本が何十万部も売れるとは思わないし、日本の文学の流れの上にはこりがちよと乗った程度の作家です。でも、三〇〇年前のインディアンの女の子や、七〇〇年後のアイラ

ンドのおじいちゃんが読んで、「おもしろいな」と心が動いたり、読んでいる間は嫌なことを忘れてたりできるかもしれない。そういう人が一握りでもいるなら、ぼ

くが書くことで物語と読者とがつながる。ささやかだけれど、「ぼくがいてよかった」という錯覚を信じていたがために書いている。

**廣野** ● 錯覚ではないですよ。かりに世界に一人しか読者がいなくても、その人と一瞬でもつながれば、何かが伝わる。物語はそういうものではありませんか。

**いしい** ● 国語学者の大野晋さん(故人)が『古語基礎語辞典』で「物語」ということを定義しています。物語の(もの)は、「もの悲しい」、「もの思いに耽る」、「もののおわれ」などの(もの)と同じだ。この(もの)は「人間にはいかんともしがたい巨大な流れ——季節の移りや身分、死、病など」のことで、「ものがたり」は「巨大な流れに巻き込まれたかのように書いてしまうもの」だと。

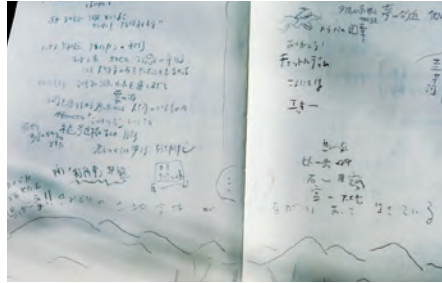
**青葉** ● ……ハツとする話です。最近、作品の中に力強く押し流されるような流れがあることをよく実感します。これまでは技巧的な部分や、構成の作り方に目が向いていたのですが……。

**いしい** ● 読んでいて、わけもわからないのに「すごい！」と思うことがある。

**青羽** ● ありますね！

**廣野** ● これはすごいと感じた瞬間、全てを忘れさせてくれる。「あれもこれも、大切」という迷いが消える瞬間に出会わせてくれるのが、物語の力ですね。

**青羽** ● 一文だけで、心を持っていかれる



2019年7月にトウバ共和国を旅したときの日記。子どもの頃から旅行先では日記をつけていた。ライター・デビューは、「シーラカンスを釣りたい」と会社を休んで行ったコモロ島旅行で書きためた旅日記が注目を集めたことがきっかけ

ことがありますね。

本を読むとき、人間はもちろん文字を見ていますが、何か別のもの——自分の中に浮かびあがってくる像が見えている気がします。この像を生む力こそ小説の特徴だと思えます。

例えば、バスの中で読んでいた本を閉じて降りて歩き出したとき、思考はまだ物語に持っていかれている。「自分の場合だとどうだろう」、「こういうことを言っているのかもしれない」と引きずられて考えている。この瞬間が、文章を読んでいるとき以上に「読書をしている」瞬間だと感じます。

**いしい** ● 読書中の時間の流れは川のようなもので、読むことはその川に飛び込んでびしょ濡れになることです。読み終わって河原に上がり、自分の水辺に飛び込むのですが、やはり水が「うつる」のです。

**廣野** ● 物語の「水滴」がくっついてくる。

**いしい** ● 古典と呼ばれるものは、何百年たっても、別の言語に翻訳されても、その水が薄まることはないのです。プール——ストも夏目漱石も、ことばにならない巨大な塊を抱えているからこそ書く。あらすじやセリフだけでなく、そのむこう側にあることばにならない部分から滋養をもらっている実感もあります。

**青羽** ● 文章は氷山の一角。小説を読むことは、その下の塊にぶつかることだと思う。だから最近、読書をするとう自分の軸がぶれてしまいうそりで怖い……。

**いしい** ● ぼくは、最初の数冊を書いたときは、他の人の小説は読まなかった。**青羽** ● 一六歳で書き始めて、今は一九歳。

この三年は、価値観が一月単位で変わる感覚を肌身に感じています。作品と自分の距離が近すぎると、スタート地点とゴール地点とあまりにも価値観の違う自分が反映されて、作品として成立させるのが難しくなる。今はそれが悩みです。

**廣野** ● 青羽さんの所属は総合人間学部。文理のどちらも学べて、多彩な分野から専門が選べる学部です。理系にも興味があるとのことですが、創作と研究とは距離をおきますか。

**青羽** ● (ぼく) という存在が真ん中にいて、そこから延びるノードに執筆や学問、サークル、友人がある。創作と学問とはすでに分かれている感覚です。

**廣野** ● それなら、何をしても大丈夫。中心にしっかりとした自分があるのなら。**青羽** ● ただ、その自分がさうとう揺れている。(笑)

### 物語のゆく末は制御できない

**廣野** ● 私の指導学生に、ミステリー作家の橘ユマさんや、ファンタジー作家の天川栄人さん(ともに人間・環境学研究科修士課程修了)がいます。在学中に、橘さんは第一回「カクヨムWeb小説コンテスト大賞」、天川さんは第十三回「角川ビーンズ小説大賞審査員特別賞」を受賞して、

作品を出版しました。文学を研究しながら創作活動をするのは、学ぶことも多い一方、切り替えにも苦労したのではないかと思います。論文は明快で論理的な文章で書かなければなりません、小説はわかりやすければよいとはかぎらない。**いしい** ● 二〇一五年の『悪声』という小

説で、河合隼雄財団が運営する「河合隼雄物語賞」をいただいたのですが、三名の審査員が顔を合わせての一言めは、「悪声」わかった?」だったそうです。(笑)一文一文は一〇歳の子でも、おじいさんでもわかるように書いているのですが、小説の構造全体を見るとわからないようです。自分でもそうで、毎日、手もただけ見ながら藪を切り分けているから、どういふ山道を歩いているのかわからない。振り返って刈りとった跡を見てはじめて、かたちがわかる。もちろん、きちんと構図を決めて最後の一行から書く人もいます。最後にこのセリフが出てくるなら、こういう場面、展開になるはずだと。

**青羽** ● ぼくは先に構図を決めるタイプです。でも、わかりにくいけれどもおもしろい小説は、筋が通っていておもしろいものを書くより難しい気がします。わからなくても引き込まれるものは、絶対的にはずれな方向には進まない。執筆中には書いているシーンだけを意識していても、つねに全体のバランスを本能的に維持しなければ、わからなくておもしろいものは生まれなと思うんです。

**いしい** ● その方向感覚を鍛えるには、他の小説を読むことです。読み続けていると、「こうきたら、こう」、「あつ、足もとが崩れてきたな」とわかる。

今日も午前中に書いていると、「なんやこれ、どうなるんや」というエピソードが出てきました。でも、やみくもではなく、「きな臭い感じは保たなければ」と、使えない色や音のイメージは遮断しながら進んでいる気はします。

**青羽** ● ぼくも、今日の午前は執筆していました。計画しないと書けないので、朝に時間を作っています。

**いしい** ● 毎朝書いてみると、小説がひっぱってくれることもありますよ。本をずっと読んできたので、「本は終わるものだ」と信頼して、思い込んでいて、自分の書いた小説も「このまま最後まで進むはずだ」と。とにかく、寝ぼけているときが書くには一番よい。(笑)

**青羽** ● 寝ぼけながら、コーヒーを置いて、椅子に座ればこちらのものです。逆に、目が覚めている午後は椅子に座るまでが遠い。(笑)

**いしい** ● 夢や無意識が開く「眠り」の状態は、まだことばになっていないイメージが頭に吹き込んでくる気がします。青羽さんのことばはきれいで、間違いもないのですが、無意識に開いている気配があります。そうした気配はぼくとも共通していて、それが朝に書くことに通じているのかもしれない。

**廣野** ● 日常生活の中に、虚構の世界を生み出す仕掛けづくりが必要なのですね。**いしい** ● ぞんざいになると、小説はそれほど向きます。「へです」じゃなくて「へだつた」かな」と、ちょっととした部分をちらつと見てやるだけでも違う。盆栽みたいに、毎日少し枝を切るだけでも世話したことになるようなところがある。

**青羽** ● 旅行中も、一瞬でもよいから書く



さまざまな縁に引き寄せられて決めた町屋の住まいにて。左に写るのは長男のひとひくん(2013年撮影)

ようにしています。**いしい** ● ぼくも旅日記をつけると、一日に大学ノート五ページ分になる。(笑)

### 京都と京都大学を遊びつくす

**廣野** ● いしいさんは大阪生まれで京都大学に進学され、東京、神奈川、長野と移り住んだ後、京都に戻ってこられたのですね。

**いしい** ● 京都には不思議に引き寄せられた感覚でした。嫁さんの助言もあって京都に決めたのですが、家の下見に行くと、ドイツさんというオランダ人が半年前まで住んでいた。「待てよ」と日記を読み返すと、八か月前にオランダ人のドイツさんと宴会をしていた。(笑) 縁を感じて引越すと、三日もしないうちにたまたま外食した隣の席がKBS京都のプロデューサーで、ラジオ番組のレギュラーが決まった。

その年は祇園祭の山鉦町の長老が集う宴会に同席することにもなり、これはもう、「奥までちゃんと見せたるから、京都を書け」と言われているのだと。だから、京都で書いた本は全て京都のお話。京都はただの場所ではなくて、自分のご主人のような感じですよ。(笑)

**廣野** ● 私も大阪出身で京都大学に行き、その後いったん外に出ました。京都は充電してエネルギーを帯びなければ寄せてくれない土地のように感じます。エネルギーを蓄積しなければと、今は京都から奮起する力をもらっています。

**青羽** ● 京都は「因果が煮詰まっている」感じがします。狭い範囲にたくさんのお学生

がいて、そこでぐるぐるとかき混ぜられているイメージです。(笑) 喫茶店で隣り合った人が知りあいの知りあいで、そのまま遊びに行くこともありました。毎日いろいろなことが起こって、とても楽しいです。

**廣野** ● 私は一九八〇年前後の世代の京大生。その頃の「自由」は、「やりたいことを、やりたいだけやりなさい」という感じでした。独文学専攻でドイツ語との格闘でしたが、京都大学交響楽団に入っていたので、練習にもかなりの時間とエネルギーを注ぎました。自由であるためには、自分で考えることに責任を持つという厳しさもありますね。

**いしい** ● 後押しをしてくれた奥村先生の、「きみはいろいろな経験をしなさい。そのために大学に行くんやから」ということを意識して、在学中は文学部だけでなく、医学部や工学部、法学部、あちこち訪ねました。「現代ギリシャ語と古代ギリシャ語とはどう違うのか」を思いついたから聞きに行ったりもした。それでも、どこもよそ者扱いせずに、面倒をみてくれた。いろいろな世界に混ぜてもらえたことは大きかった。今の京都大学でも、できることだと思えます。

**青羽** ● 昨年(二〇一八)は宇宙飛行士の土井隆雄特定教授が主催する「有人宇宙学ゼミ」に参加して、無重力体験をしました。今は地球科学のゼミにいて、置いてある工具を使って、思いついたものを作ったりしています。京都大学にはいろいろ経験できる場所がたくさんあるので、「遊びつくしてやろう」と思っているところです。(笑)



青羽さんは、学内のジャグリング・サークルに所属。中学生からの趣味の一つで、京大の11月祭などで披露している

**廣野** ● 有用性にとらわれず、おもしろさ追求することを誇りに思うのは、今も昔も変わりませんね。

**いしい** ● 自分に何が合っているのか、何が間違っているのかではなく、まずはやってみること。そうして過ごした四年間が今の自分の下支えをしてくれています。一八〜二二歳の若者に、周りの大人がそのように対応してくれたことが自分の芯として残っていて、他人が自分を少しでも必要としているなら、いくらでも使ってくださいと思っています。そういう自由が培われました。

**青羽** ● 「自由の学風の危機」といわれますが、学生にも責任があるかもしれません。とりあえずやってみる。交流イベントに参加したり、教授に話しかけてみたり。ぼくはそういう姿勢でいたいし、そういう人間こそ京都大学に来ると楽しいはずですよ。

**廣野** ● これからも、お二人のご活躍に期待しています。

対談日 二〇一九年八月二六日(月)  
対談場所 京都大学百年時計台記念館一階  
大学図書館長室  
撮影場所 附属図書館

# 京大ならではの、 ポップな頭脳集団だった

川下大洋  
(俳優・演出家)



## かわした・たいよう

1958年、長崎市に生まれる。1978年に京都大学理学部に入学。1983年に卒業。1988年まで劇団そとばこまに在籍。その後、フリーの演出家として活動を開始。1998年に劇作家・後藤ひろひとと演劇集団「Piper」を結成。コント「田王」やイン・パスターズ「プロビアス・バスターズ」に参加。読売テレビ「ウェークアップ!」をはじめ、ナレーション業務も務める。吉本興業所属。

私の中身は今でも男子高二年の文化祭のまま。女子にもてるための出し物は何かを考え、それを実行する。同じ事を繰り返しているのはダメなので常に新しいことを模索する。

一九七八年、京大理学部に入學した。動物行動学を専攻するつもりだったし軽音サークルにも所属するつもりだった。そのまま行けば今とは違う人生だっただろう。だが四月に劇団に入ったことで私の人生は別の枝に分かれた。

## 演劇に

### 〈若い普通の女子〉を集める

〈そとばこまち〉は当時学内にできたばかりの劇団で現在でも続いているのだが、私のいた十年は今思えば先鋭の頭脳集団だった。演劇としての芸術性も追求するが、それをエンタテインメントに昇華する手段を考えることに時間とエネルギーと才能を費やした。実際その後大活躍するクリエイターを多く輩出した。

ポップであろうとする姿勢は演劇を思想に結びつける人からは攻撃され、当時主流だったアンダグラ演劇からは「おいがいないキムコのような劇団」と揶揄された。我々は面白がって「キムコクラブ」というファンクラブを発足させた。にいななど要らない。必要なのはファッション性だ。どうすればコアな演劇ファンではない一般の若い普通の女子を劇場に来させるかに腐心した。それが成功したからか、当時の関西演劇ブームを牽引する存在にもなれた。

そんなそとばこまちは京大の気風が育んだ劇団だ。私が入った当時、劇団は教養部のキャンパス、A号館の中庭の老朽化のため使われていない校舎（中央館）で稽古していた。二四時間、いつでも早い者勝ちで使えた。いま吉田生協があるところにサークルBOOXを得てからは、劇団員は朝（または昼または夜）BOOXに集まり、BOOXから授業に行ったり行かなかったりした。11月祭には毎年参加して、E号館の大教室を劇場にした。

### 遠回りでも、 ゼロから自分たちで

三回生の時に劇団は学外に出ることを決断、烏丸御池のビルのワンフロアを借り、芝居の公演も打

てるアトリエとした。五〇人の大所帯。男子は京大生、女子は京大や同志社、そして京女などの女子大から来ていた。

アトリエが出来てから劇団員は大学へ行くかアトリエへ行くかの二択を毎日追られた。私にはもちろん大学には立ち寄り

もせずアトリエへ直行した。当時の理学部にあつて、単位は空から降ってくるどころかそこらへんにザクザク落ちていて、私のような者でも卒業はできた。だが他の学部の者たち、特にちゃんと勉強・卒業して就職しようという者たちはジレンマに苦しんだようだ（その甲斐あって彼らはいま各業界のトップで活躍している）。

さて学外に出たとはいえず学生劇団。その後プロになった者も多いが当時は素人どころか全員初心者。それでも、技術もアイデアもゼロから考えた。自分たちで考えるこ



ウディ・アレン原作「ボギー！俺も男だ」を上演したときのワンシーン。市販の戯曲の翻訳に納得いかず、文学部の後輩と苦勞して手直した。中央が私

とを優先し、他の劇団や演劇人からノウハウを学ぶことはしなかった。リーダーが決定すれば早いから全員で何時間もミーティングした。だからこそ、当時のブームを巻き起こす存在にもなれたと思う。

トップダウンを嫌い、皆がクリエイターとして切磋琢磨する。その姿勢をお互いが尊重する。効率のいい管理システムを作る方が楽だろうが、手間がかかっても個人の自由を守る環境を維持する。そんな場所にはいられたことが今の私を作っているし、私の誇りだ。

\*冷蔵庫で使用する消臭剤の商標名。

授業に潜入!



# リーダーの条件は自分と他者の「コミュニケーション」を知ること

総合生存学館 大学院専門科目「ブルーオーシャン・シフト戦略論」

ブルーオーシャン・シフト戦略とは、イノベーションを生み出すツールの一つ。既存の市場でパイを奪い合うのではなく、あらゆる分析手法を用いて、未開拓の市場の発見や、新たな価値の創造をめざす考え方だ。しかし、いくらしっかりと戦略をたてても、同じ方向をめざして取り組む仲間なくして、世の中の潮流は動かせない。先頭に立って、国際社会で同志を導くには、どんな力が求められるのだろうか。海外の民間企業や数か国の国際機関でも活躍した二人の教員が長年におよぶ国際社会でのリーダーシップ経験をもとに、リーダーのあるべき姿を伝える。

河合美宏 ●これまで三〇年近く、海外で組織やチームをリードし、さまざまなリーダーと接してきました。リーダーの性格や特徴は多様ですが、優れたリーダーの資質に共通するのは「自分の人生は自分がつくる、自分の人生は自分が責任を持って生きる」という姿勢です。情熱を持って、「自分がどうしてもやり遂げたいことを叶えよう」と生き、生きる生き方です。情熱を持っ

て打ちこめない人が、どうやって他の人をリードして、やる気にさせられるのでしょうか。例えば、ネルソン・マンデラは二七年間の牢獄生活の間も黒人解放への使命と情熱を失わず、南アフリカ政府の方針を変え、アパルトヘイト廃止を達成しましたが、それがよい例でしょう。

人生には、晴れの日もあれば、雨の日や暴風雨の日もある。どんな環境に置かれても、リーダーとしてこれから国際舞台で活躍する京都大学の学生は、自分の成し遂げるべき目標を見出し、航海を続け、目的を達成することが大切です。

私たちはこの授業を通じて、学生が目標を見つけ、どんな環境でも航海を続け、目的地にたどり着く方法を学べるようにしたいと思います。その目的地にたどり着く方法とは、自分を知り、相手を知り、相手とつながり「事を為す」ということです。

河合江理子 ●日本に比べて海外では上意下達の命令よりもチーム内の対話が重視されます。上司も部



河合江理子  
総合生存学館 教授



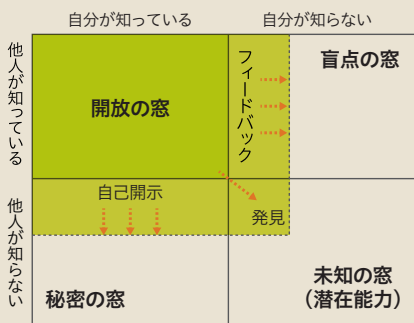
河合美宏  
経営管理大学院 特命教授、  
総合生存学館 非常勤講師

## 1 心の持ち方 (Mind's Eye)



自分の「心の持ち方」を知る課題: どうすれば、play not to loseの心持ちをplay to winに変えることができるでしょうか。これまでの経験の中で、どうしてもできないことが、あるときできるようになったのは、どのようなときでしたか。(ジョージ・コーリー著「セキュアベース・リーダーシップ」掲載の図を一部改変)

## 2 ジョハリの窓



自分の「窓」を知る課題: 他の学生の「Lifeline」や「success stories/failure stories」をじっくり聴いて、敬意を持ち、率直にコメントや質問をしましょう。また、コメントや質問を受ける側は率直にそのコメントを聞き、質問に答えましょう。受け取ったコメントや質問に自分をさらに知る鍵が隠されています。

### かわい・よしひろ

東京都に生まれる。ロンドン大学シティ校で博士号取得。東京海上火災保険株式会社、労働省や、パリのOECD、ポーランド政府財務大臣顧問などを歴任し、保険監督者国際機構を1998年に100か国以上の政府のサポートを得てバーゼルで設立。2017年末まで15年間事務局長を務める。2018年から現職。2019年から金融庁参与、東京大学公共政策大学院客員教授も兼任。

### かわい・えりこ

東京都に生まれる。日本の高校卒業後、米国ハーバード大学で学士、フランスの欧州経営大学院(INSEAD)でMBA(経営学修士)を取得。ロンドンの投資銀行SG Warburg & Co.のファンド・マネージャー、ポーランドで国営企業の民営化事業に携わる。国際公務員としてスイスの国際決済銀行、パリのOECDで職員年金基金の運用責任者などを務めた後、2012年から現職。

下も平等に意見が求められますし、リーダーはそうした関係の中で、仲間をひっぱるリーダーシップを發揮せねばなりません。  
河合(美) ●リーダーに重要なのは、業務を振り分けて命令することではなく、チーム・メンバーの気持ちを理解し、士気を高め、いかにモチベーションを向上させられるのか。これを知るには、自分や他者の「こころ」を知ることが第一です。  
河合(江) ●当たり前前のことですが、自分も他者も「こころ」を持つ「人」



なのです。自分の心だからわかっていて、コントロールできると考えずに、心の働きを知ることが大切です。

### 自分を知る

### 〈心の持ち方〉は一人ひとり違う

私たちは同じ経験をして、違った感じ方をします。あるいは、同じものを見ても違って見えます。これは私たちの「心の持ち方」(Minds)がそれぞれ異なっているからです。例えば、水が半分入ったグラスを見て、「まだ半分もある」と元気になる人もいれば、「もう半分しかない」と気落ちする人もいます。この心持ちや気持ちは何事をする場合でも、決定的に重要です。



人間は新しい挑戦や大事な局面になると、緊張して失敗をしないように慎重になり (play not to lose)、思っている自分の持ち味を出して大胆に攻める (play to win) ことをしなくなりがちです。①

これは、人間が生命体として長い間生きながらえてきた本能によるものでしょう。観客の前でプレゼンをするときに、緊張して思うように話せなかったり、スポーツの試合の大事な場面で思うように普段の力が出せなかったりするものがその例です。

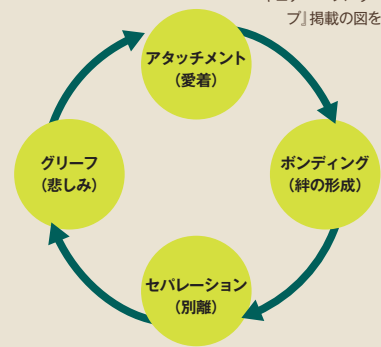
自分の心の持ち方を変える最も有効な方法は「刷り込み」です。脳を再構築 (Rewire your Brain) することです。何度も何度も繰り返し練習して、これまでできなかったことをできるようにします。これを練習として繰り返すことで成功体験を積み重ね、練習と同じような心持ちで本番ができるようになるまで、体や頭に刷り込んでしまうことです。

### 他者から見た私も「私」フィードバックの重要性

自分が知る自分の姿は、ほんの一部です。人間には、四つの領域があります (ジヨハリの窓)。② 自分にも他人にも見えている「開放の窓」、自分は知っていて他人は知らない「秘密の窓」、自分は知らないけれど他人には見えている「盲点

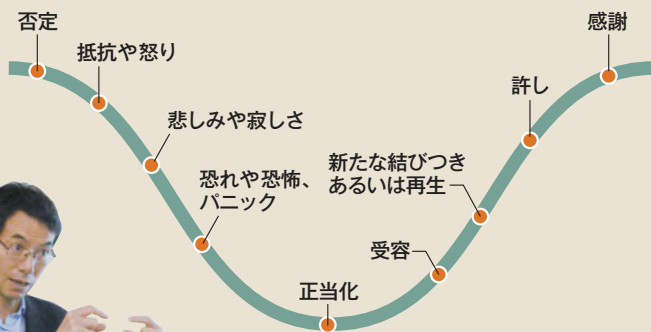
### 3 絆のサイクル

ジョージ・コーリーザ著「セキユアベース・リーダーシップ」掲載の図を一部改変



自分の人生を分析し、1本の曲線「Lifeline」を書いて発表しましょう。横軸は自分の人生 (左が0歳、右が現在の年齢)、縦軸は人生の浮き沈み (上が最高、下が最低)。所どころにコメントを入れてください。「Lifeline」の対人関係に関する浮き沈みを分析するには絆のサイクルが役立ちます。

### 4 悲しみのプロセス



「悲しみのプロセス」を考える課題  
人生の中で最も悲しかった出来ごとと、そのときの気持ちの変化を思い返してみましょう。(ジョージ・コーリーザ著「セキユアベース・リーダーシップ」掲載の図を一部改変)

### 相手を知る

### ともにゴールをめざす仲間を知る

自分を理解した後は、「他者」の理解です。この図 (絆のサイクル) は人間関係の縮図。③ 人間関係に

の窓」、そして、自分にも他人にも見えていない「未知の窓」です。四つ目の「未知の窓」は、その人の潜在能力ともいえます。

自分で見える「開放の窓」と「秘密の窓」は、これまでの経験を振り返ると見えてきます。「盲点の窓」を知るには他者からのフィードバックが必要です。授業では、与えられたテーマに沿って、自らの経験や考えを発表し、他の学生からフィードバックをもらいます。フィードバックは率直に聞きましよう。「私はそんな人ではない」と思ったとしても、他人からはそう見えているのです。(笑) フィードバックをする側も、敬意を払いつつ、率直に伝えることが大切です。そうして自分自身に向きあうと、「盲点の窓」、「未知の窓」が見えてきます。特に未知の窓を知ることがは、自分の無限の可能性を自覚し、開花させてくれる鍵です。ですから、みんなでみんなのフィードバックをすること、フィードバックを受けることが授業の要です。



かぎらず、仕事との関係や、故郷やペットとの関係も含みますし、関係の深浅に関わらず、このサイクルをなぞります。

まずは、「アタッチメント」。新しい人間関係や仕事などとの間に愛着を形成することです。心を開いて、関係を築く準備です。それから、「ボンディング」、絆を築く働きかけです。軽いあいさつもボンディングですし、ともに生活するのはより親密なボンディングの一つです。次に「セパレーション」。人が〈誰か〉または〈何か〉を手放す、別れることです。肉親や友人との死別もあれば、卒業して「学生生活を離れる」という節目もひとつの別れ。出合いがあれば別れがあります。別れの後には「グリーン」。絆の終わりや、慣れ

親しんだ行動パターンの変化で生じる「悲しみ」のことです。悲しみの深さは、結ばれていた絆の強さを意味します。

悲しみにも「悲しみのプロセス」というサイクルがあります。④ 悲しみに直面したとき、人はまず否定したり、怒ったり、さまざまな感情を覚えます。誰かと別れたときに、相手を否定して怒ったりします。好きだった仕事を離れたときに覚える喪失感もそうです。しかし、時間がたつて客観的にみられるようになると、肯定や許しの段階をへて、悲しみから抜け出します。

この人生のサイクルをわかっていると、自己の理解も高まり、仲間との共感も深まります。自分を理解するときにも、「今はこの段階」とわかれば、「これから悲しみが和らげる」と思えたり、「いつか許せる」と心持ちが変わったりします。

仕事と私生活とは切り離せるものはありません。同僚を理解するには、同僚の普段の生活についても知っておくべきです。リーダーは相手を知り、相手の気持ちを理解して考えます。相手の失敗やモチベーションの減少が何に起因するのか。日ごろから話をしたり、きちんと関係を築いてはじめて、他者のサイクルを知ることができま

## 5 セキュア・ベースの例

人	場所	出来ごと	経験	目標	そのほか
母	国	結婚	子ども時代	目標の達成	ペット
父	自宅	葬式	学生生活	昇進する	信念
きょうだい	自然	スポーツ	大学時代	親になる	宗教
配偶者	公園	災害	親としての経験	家を買う	習慣
教師	海	事故	就職する	資格を取る	仕事
コーチ	山	危機	職業経験	病気からの回復	趣味
上司	オフィス	昇進			
同僚		休暇			
友人					



自分の「セキュア・ベース」を知る課題

あなたのセキュア・ベースはなんでしょう。思い浮かぶものを書きとめて、隣の人とそれぞれのセキュア・ベースについて意見交換をしてみてください。  
(表の出典・ジョージ・コーリー著「セキュアベース・リーダーシップ」から抜粋)

## 心の拠り所があれば、挑戦もできる

リーダーとして相手を理解するもう一つのポイントは「セキュア・ベース」。

⑤ 安心感を与える心の拠り所です。両親や先生、友人など、特定の〈人〉もそうですし、故郷などの〈場所〉、趣味やこれまでの〈経験〉もセキュア・ベースとなりえます。「ここに戻ってくれば大丈夫」という安心感は、リスクを取る勇氣にも、ゴールに向かう原動力にもなります。自らのセキュア・ベースを知ることが必要です。みなさん自身がいつか、チームのメンバーのセキュア・ベースになってほしいと思います。

今、日本で生まれるイノベーションが減っているのは、リスクをとって挑戦することができないからかもしれません。組織の文化として、挑戦を促したり、親身に相談を受けてくれるリーダーが減っているのではないのでしょうか。効率を重視されて、人工知能やオンライン経済がさらに普及すると、人との関係も薄れがちになります。そうした時代であるからこそ、人の心の動きに注目したアプローチに意義があると思います。

この後の授業では、このリーダーシップの話をもとに、さまざまな実践をしてもらいます。

2019年7月26日(金) 13:00-

受講生は、異分野融合の知識を携え、世界で活躍するリーダーをめざす総合生存学館の大学院生たち。ブラジルやウクライナ、中国、日本など、出身国や育った環境の違うメンバーが集う。授業は全て英語。開講前から英語での会話が飛び交う。

最初の課題は、〈1分間スピーチ〉。河合江理子教授が重視するのは、簡潔に述べることと、正しい気持ちの持ち方、身ぶり手ぶりや視線(eye contact)などを使ったボディ・ランゲージ。

**河合(江) ●発表者が緊張していたら、聞き手も緊張してしまう。話に集中できず、せつかくの内容も伝わりません。**

スピーチのテーマは、「リーダーシップに重要なことは何か」。各自の経験を交えながら、自身のリーダーシップ論を発表する学生たち。緊張感がこちらに伝わってくる学生もいれば、聞き手とコミュニケーションをとり、その雰囲気に応じて柔軟にスピーチをする学生もいて、個性はさまざま。スピーチが終わるごとに、発表の何倍もの時間をかけてフィードバックし、課題を引き出していく。

**フィードバックの例**

話すスピードが速く、ひっかかる部分がなく終わってしまった。強調したい部分とそうでない部分に緩急をつけ、感情や思いが伝わるとよい。

時間を気にして、表情にナーバスさがにじみでている。こちらもそわそわしてしまう。

メモを見すぎて、思いが伝わってこない。せめて結論だけでも、聞き手の目を見てほしい。

緊張や過度な集中状態におかれると、自らの発表の問題点を把握するのは難しいようだ。自分では意識していない点を鋭く指摘され、納得したり、がっかりする学生たち。

**河合(美) ●発表をスマートフォンで動画撮影するのもおすすめ。一人でもフィードバックができますよ。**

次に取り組むのは〈ディフィカルト・カンパセーション〉。日本企業ではあまり見られないが、海外では賃上げや改善点の提案など、上司と直接に交渉する機会が多い。

**河合(江) ●感情的になると、状況は悪化します。相手の気持ちや感情を十分に汲みつつ、可能な解決策を探す。その一方で、「できないこと」ははっきりと伝えなければいけません。**

2人1組になり、上司役と部下役を決める。部下は「子どもが生まれたから給料を上げてほしい」、上司は「賃上げには応えられない」という立場で交渉を進める。



学生生活、アルバイトなどを通して得た経験や、上下関係で感じたことなど、それぞれの思うリーダーシップ論を発表する。どうすれば聞き手を惹きつけられるのか、実践を重ねて学ぶ

**河合(江) ●利益や結果、二者択一の答えを求めるのではなく、譲歩できるポイントを探して丁寧に関係を築くこと。これが納得のいく結果を得る第一歩です。**

いきなり交渉には入らずに、これまでの課題での経験やアドバイスをもふまえて雑談をはじめると、工夫する学生たち。

**河合(美) ●労働時間を減らしたい、仕事のサポートがほしいなど、給料アップを求める裏に、本人も気づいていない悩みがあるかもしれません。相手の気持ちを引き出せるよう、会話を丁寧に重ねます。**

交渉の難しさに頭をかかえる学生もいたが、中には10パーセントの賃上げ交渉に成功した学生も。上司役の学生も、ベビーシッター制度やフレキシブルな労働時間など、賃上げではない支援を提案し、たがいに譲歩しながら納得のいく結論を導けるよう奮闘していた。

ロールプレイ後は1分間スピーチと同様に、フィードバックを重ね、自らの会話を振り返る。

**フィードバックの例**

要求に応えたい思いはあっても、会社全体のことを考えると、「将来的には」、「うまくいけば」と、にごしたような返答しかできないつらさを感じた。

できるかぎりの共感を示してくれたので、要求を伝えやすかった。

交渉の途中で従業員の仕事の評価を持ち出されるのは、人質に取られているようで不信感が芽生えてしまう。

これまであまり想像していなかった〈上司側の立場〉の難しさが印象的だったと話す学生も多かった。

**河合(江) ●こうしたさまざまな感情は、実際に働いてみると、身にしみてわかるはず。みなさんがリーダーとして活動するとき、今日の経験をぜひ思い出してください。**

# 恩師を語る

中西 寛  
法学研究科 教授



なかにし・ひろし  
1962年、大阪府に生まれる。京都大学法学研究科博士後期課程退学。京都大学法学部助教を経て、2002年から現職。2016年から18年に同大学公共政策大学院 院長も務めた。

\*写真(中西教授の近影をのぞく)は、高坂正堯先生の弟の高坂節三さんの提供

戦後日本を鋭く見つめた先覚者

## 高坂正堯

## 潜れども潜れども

## 叡智は深く

東京オリンピックの開催と東海道新幹線の開通を間近にひかえた一九六二年末。日本経済が飛躍的な成長を遂げ、戦後の新しい日本の萌芽がみられるこの時代に、「現実主義者の平和論」で鮮烈な論壇デビューを飾った高坂正堯先生。佐藤栄作をはじめ、三木武夫、大平正芳、中曽根康弘の歴代内閣にブレインとして関わった。その中でも、佐藤内閣最大の功績とされる沖繩返還では重要な役割を果たすなど、日本の外交政策に多大なる足跡を残した。教育にも一貫して力を注ぎ、多数の研究者を指導。

高坂先生の直弟子の一人として、後を引き継ぎ、国際政治学講座の教授を務める中西寛教授に導かれ、「巨人」が見つめた広大な思索の海の波打ちぎわに立ってみたい。



高坂先生の話し方は独特。(京都弁)といわれるが、高坂先生ご自身は「幼少期に東京で暮らしたので純粋な京都弁ではないんや」と口にしていたという

高坂正堯先生の処女作『海洋国家日本の構想』の刊行から五〇年あまり。「現実主義者の平和論」を収録するこの書籍をはじめ、上梓した多数の著作は、今なお絶版になることなく、書店の本棚に並ぶ。

「その指摘は鋭く、三〇歳頃の若さで書かれたとは信じられません。とはいえ、常人はずれた洞察力と、広い見識に裏打ちされた知識の蓄積ゆえの論理展開は、歳を重ねたからといってまねできるものでもない」。高坂先生のもとで国際政治学者を志し、その警咳に接してきた中西寛教授。「いつもユーモアを忘れない先生。(怖い)印象はありませんが、前にすると『頓珍漢なことは言えないぞ』と緊張します。相談に行けば、即座に勘所をつかんで、鋭い示唆をいただきました。ともに過ごした時間は短くとも濃密に感じるの、そうした一つひとつ

が印象的だからでしょう。」「**「国際政治学」の講義**がずば抜けた知性が光る。一九八三年、大学三回生の「国際政治学」の講義で出会い、強烈な個性を目のあたりにした。「とにかく膨大な知識量。講義のはしばしにその片鱗がうかがえますが、何より魅力的なのは、知識の受け売りではなく、ご自身の見方で咀嚼して話されること。他の政治学者たちが見えない・言わないような角度からの指摘が飛んでくるのです」。政治学に関連する授業はほとんど受講したが、高坂先生の授業は突出してユニークだった。学生に必要な知識を(流し込む)のではなく、自身の国際政治の見方・考え方を前面に押し出すスタイル。「その熱にあてられて、国際政治学ゼミに入りました。著名な(スーパ)教授なのだと思ったのは、実はその後のこと」。



1989年から「サンデープロジェクト」に出演。柔らかな京都弁で、問題の本質を指摘した



中曽根康弘元首相(右から3人目)と高坂先生(左から2人目)。中曽根元首相は高坂先生のお別れ会に参列され、その後の内輪の会合で「高坂先生は学者が政治とつき合う距離感のモデルを示された」と思い出を語られた

高坂先生のゼミは、一学年三人の  
大所帯。名の知れた先生だとい  
う理由もあるが、懐の深い人柄  
と、鮮烈な視点到魅了された学生  
たちが目を輝かせて受講した。「ゼ  
ミの新歓コンパは高坂先生の発案。  
『天眞』という名のすき焼き屋さん  
は、阪神タイガース・ファンゆえ  
のセレクトでしょうか。もちろん  
コンパの締めは六甲おろしの大合  
唱(笑)。中西教授と高坂先生と  
の昵懇の日々が始まった。

その頃の高坂先生は、中曽根康  
弘首相の私的諮問機関「平和問題  
研究会」の座長を務め、多忙を極  
めた。頻繁に東京に足を運んでい  
たが、講義もゼミも休講はほぼな  
かったという。(ホームグラウンド  
はあくまでアカデミズム)が高坂  
先生の信条で、東京行きは日帰り  
がほとんど。最終の新幹線で京都  
に戻っていたという。「愚痴は一度

も聞いたことがあります。ご自  
身のことはあまりお話しにならない  
ので、カメラクルーに取り囲ま  
れるニュース映像を見て、私たち  
は先生の状況を把握していたほど  
です」。

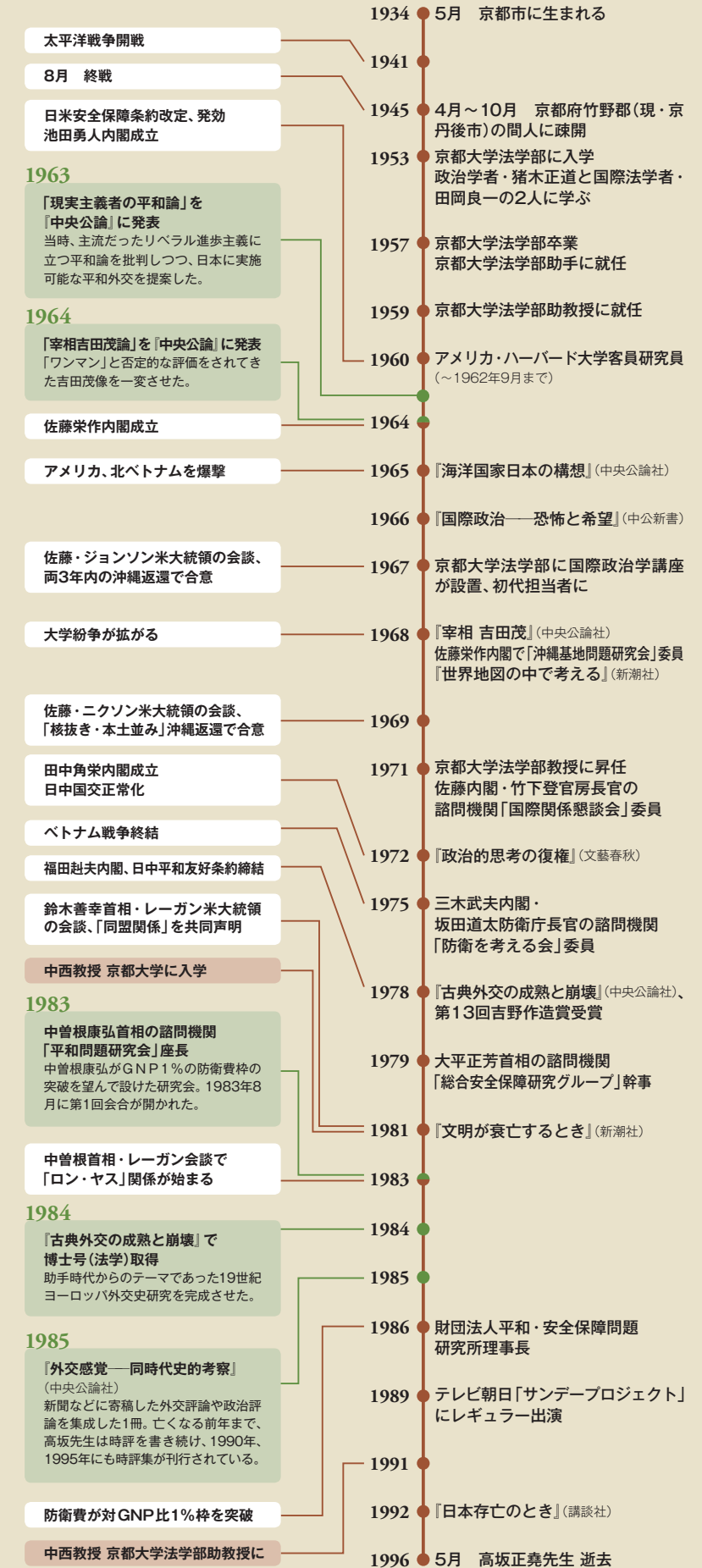
大学院に進学後は、さらなる深  
淵に触れた。「私たち学生が思いつ  
くようなことはすでに熟考済みで、  
『そこは違うんちゃうか』とまるで  
下準備をしてきたかのよう、正  
確に指摘される。たった二、三言  
で問題点を射抜く、鋭い観察眼。数

分お話をするだけで、『特別な能力  
を持つ人だ』とわかります」。

毎週月曜日のゼミの後には、みなが  
昼食を取るのが恒例。「コーヒーを  
飲みながら一時間ほど、よもやま  
の話をするんです。ゼミのテーマ  
にまつわること、政治や外交など  
の時局的な話、もちろん阪神タイ  
ガースについても(笑)。高坂先  
生がいると、院生からも自然と発  
言が飛び出した。「まるで触媒のよ  
うでしたね」。

(次ページに続く)

## 高坂正堯(こうさか・まさたか)略年譜



\*著作は一部のみを掲載しています。

## 突然に訪れた恩師との別れ

大学院修了後は、高坂先生の後押しを受けてシカゴ大学の歴史学部に留学。帰国後の一九九一年、国際政治学講座の助教授に就任した。担当する授業もまだ少なく、一九九五年秋に一年間の在外研究から帰国して資料を整理する中、別れは突然にやってきた。

一九九六年二月、授業が終わり、キャンパスがもの寂しくなった頃、当時の村松岐夫法学研究科長から「会っておいたほうがいい」と伝えられた。自宅を訪ねると、高坂先生は静かに口を開いた。「肝臓にがんが見つかって、これから手術せな

いかん。どれだけ休むかわからんけど、治ったら授業するし、よろしくたのむわ。青天の霹靂だった。二か月前には、高坂先生に誘われ、院生たちとアメリカンフット

ボールの東西大学王座決定戦『甲子園ボウル』の応援に行っているのです。京都大学が学生日本一に輝き、焼肉店で祝杯まであげました。呆然とする中西教授を前に、高坂先生は「へま、君がいるから後は安心やけどな」とほほえんだ。「ありがたいことばでしたが、私の頭はまっ白で、ありきたりの返事しかできなかつた」。がんの進行は思いのほか早く、回復をまたずに三か月後の五月、亡き人となった。自宅での小一時間が、高坂先生との最後の会話だった。

## 二〇年間、向きあい続けた師の著作

喪つてはじめて、高坂先生と過ごした時間が何物にも代えがたいことを痛感した。「実は、門下生時代に読んだ高坂先生の著作は、ごく一部。亡くなられてから、教えを請うように著作を開いて、向き

あい続けています」。

著作と対峙する中で、恩師が見つめた知の海の広さを知り、かつての発言の真意に気づかされた。「あの時代の人たちには追いつけへんと思うね」とこぼされたことがあります。留学からの帰国直後に私が書いた近衛文麿についての論文を読まれたときでした。当時、第一次大戦時の日本の外交を熱心に見つめていた中西教授は、のちに首相となる近衛文麿が一九一八年に書いた論文「英米本位の平和主義を排す」を題材に論文を書きあげた。「後で聞いた話ですが、高坂先生は近衛を評価しておらず、私の論文も『読む気がしない』とほうつておかれたそうです。(笑)」コソバの席で先輩が私の論文をおもしろいと評価してくれて、ようやく目を通してくださった。

感想と二緒に漏らされたのがさつきのことば。その背景には、父・高坂正顕先生をはじめとする（京都学派）にいたく、尊敬の念があった。京都学派の哲学者たちは、近衛内閣に「戦争回避」の期待をかけたが、近衛の政策は日本をさらに戦争に近づけ、失望感が広がった。「近衛への評価の背景には、尊敬する知識人への思いがあったのだと合点がゆきました。高坂先生が国際政治学を志望したこととも関係しているのかもしれないね」。

## 使命感という灯火は 最期まで消えず

中西教授の口からは、高坂先生の叡智を表現することはが次つきとあふれる。「政治の意思決定を見抜く洞察力」、〈歴史や哲学などの人文・社会科学の膨大な知識〉、〈マクロに歴史を見つめる視点〉、〈教養を積みあげることを是とする

戦前の教養主義文化と、アメリカの社会科学を受容していった戦後の時代の両方の影響を受けた人〉。口にするたびに変わる表現は、高坂先生の筆舌に尽くしがたい叡智のゆたかさを物語る。中西教授の脳裏には、生前の高坂先生の姿がくつきりと浮かんでくるようだ。病床でも執筆の手を止めなかった高坂先生。亡くなった後に三冊の書籍と、一本の論文が発表された。

「最期までりっぱな先生でした。日本という国・社会への使命感の強さが先生をかりたてたのでしょ



毎年恒例のテニス合宿。高坂門下と村松岐夫教授門下の院生が参加した。最前列左が高坂先生、「ようこそ」の看板の前に立つのが中西教授

書かれた時代は古くなくても、そういう気概が今も若い研究者の心を捉え続けています」。

シャープな理論と、ふくよかな知識・表現力との交点で、時代を体現するように日本の国際政治学を確立させた高坂先生。その一番星から放たれた光線は、今も輝きを失うことなく、研究者たちを照らし、導く。

### \*1 近衛文麿

貴族院議長などをへて、一九三七年に第一次近衛内閣を組閣。日中戦争に不拡大方針で臨むが、和平交渉に失敗。第二次近衛内閣では、大政翼賛会を設立し、日独伊三国同盟を締結。第三次近衛内閣では、東条英機の対米主戦論を抑えきれず、総辞職。戦後、戦犯に指名され、服毒自殺。

### \*2 高坂正顕

京都帝国大学哲学科を卒業。西田幾多郎に師事し、一九四〇年に京都帝国大学の教授となる。カント哲学を専攻。戦後、公職追放となるが、京都大学教授、東京学芸大学学長を歴任。

## 恩師を語る

上／熱狂的な阪神タイガース・ファンとしても知られる。1985年、阪神タイガースのリーグ優勝時の写真  
下／京都大学の準硬式野球部の部長も長く務めた高坂先生。「野球をするのも好きでしたが、技量については『囲碁と違って、野球は下手な趣味や』とおっしゃっていました」。前列右が高坂先生



## 澤田麻沙代

防災研究所 技術室

# 二四時間三六五日、 集まり続ける地震データを整理

マグニチュード六以上の大きな地震が多く起こり、毎年のように台風・豪雨による河川の氾濫・土砂災害・洪水に見舞われ、火山の数も多い日本。自然の脅威を身近に感じながら過「す私たちにとって、自然災害のメカニズムの解明や、防災・減災の手立てを探る防災研究所(防災研)の役わりは大きい。約二〇名の技術職員たちが、研究施設や観測所に設置された実験機器や観測機器の開発や維持管理、データの管理などの任務に励んでいる。



さわだ・まさよ●1980年、大阪府に生まれる。奈良教育大学卒業。

日本付近で発生する震度一以上の地震は、年に千回以上。人間が揺れを感じない小さな地震(微小地震)は、さらにその三倍以上におよぶ。日本付近では、マグニチュード八を超える巨大地震が多く発生することから、巨大地震の予測や発生メカニズムの解明には、観測データの収集と分析は必要不可欠だ。防災研究所附属地震予知研究センターでは、微小地震の観測シス

テムを運用。岐阜県から宮崎県にかけて設置された八つの観測所の他、多くの観測点でも三六五日二四時間途切れることなく計測し続けている。収集した膨大なデータの管理を担うのが、澤田麻沙代さんをはじめとする防災研技術室の技術職員たち。「観測データだけでなく、観測点の緯度と経度などの位置情報や、計測機器の情報、メンテナンス履歴、地権者の情報ま

でもが管理対象です。データを使いやすく整理できるかを考え、工夫しています」。

### 採用直後は桜島で体力勝負

一五年前に入所した澤田さんはじめての配属先は、鹿児島県の桜島火山観測所だった。島内および周辺の小島には十一の観測点があり、島外には十三の観測点があった。「桜島での仕事は体力勝負。島内をまわり、水準測量で地盤の変動を測ったり、離島での人工地震観測に参加したりしました。三〇キログラムのバッテリーを背負って山を登り、地震計のメンテナンスをしたことも(笑)」。

桜島で二年間勤務したのち、宇治キャンパスの地震予知研究センターに異動。「当時、紀伊半島において三〇ほどの臨時地震観測点を展開するプロジェクトがあり、地震観測点の新設のためにかけ巡りしました。候補地の下見や地権者との交渉、設置、データ処理からサーバー管理まで、はじめて一連の仕事に携わることができました」。

### 次世代システムの管理人

今は日常的な任務に加えて、防災研の飯尾能久教授が取り組む「満点計画」のデータ管理と、データベースの構築にも携わっている。これは観測点の数を桁違いに増やそうという試みで、「満点システム」と名付けられた地震観測システムの開発に端を発するもの。防災研を

中心に、各地の地震研究者や中小企業などと共同で、二〇〇六年頃から取り組んでいる。「地震計は一五キログラム、記録装置は一・二キログラムです。記録装置は徹底して低消費電力化されたので、単一乾電池が二四本あれば半年間観測できます。もう重いバッテリーを背負う必要はありません(笑)」。安価で高精度、メンテナンスの手間も少ない満点システムを使えば、「万点規模」の観測網が築ける。数が多いほど、震源断層をより正確に診断することができるので、データの量と質の飛躍的な向上が期待されている。

現在、近畿や島根・鳥取県周辺、長野県西部、ニュージランドにおよそ三〇か所の観測点を設置。規模が大きくなれば、データも膨大に。「半年間で、一観測点あたり四ギガバイトの記録カードを五、六枚使用しているので、全観測点の合計は一五〇〇枚、約六テラバイトのデータが集まります」。これらのデータとともに、観測に関するあらゆる情報を管理する。

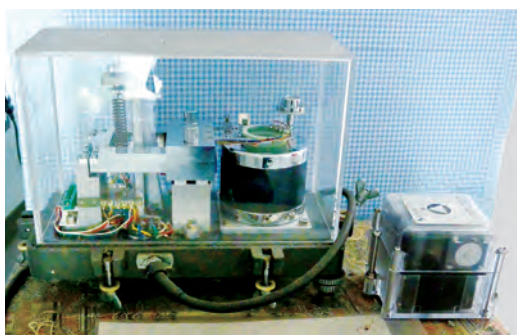
澤田さんが骨折りでつくりあげたのは、観測点を維持管理するための情報だけではなく、解析に必要なの位置情報や機材の特性値などの関連した情報も管理できるウェブデータベースシステム。「他大学と共同で鳥取県西部地震震源域に一〇〇〇点の臨時観測(〇・一満点観測)をしたときも、関係者間で情報を共有するために、データベ

スと連携したウェブページを作りました。活用していただけてうれしかったです」。

澤田さんは教育大学の出身。専攻は理系だが、何か専門的な知識を身につけたわけではなかった。「もともとパソコンは苦手でした。求められるものに応えたくて、勉強と挑戦を続けています。室内に所狭しと積み上げられた無数のサーバーの重苦しさを跳ね飛ばすような、明るい笑顔でいることを心がけている」。



↑「満点計画」の観測網(出典・国土地理院)  
→従来の地震計(左)と満点計画で開発した地震計(右)



# 「怪異」の跋扈する社会の したたかな人びと



高谷知佳 (法学研究科 准教授)

雷神と化して朝廷を襲った菅原道真、源頼光に倒された土蜘蛛や酒呑童子、家宝の皿を割って主人に手討ちにされた「番町皿屋敷」の亡霊……。前近代の怪異・怨霊の物語は、多くの史料に記され、能や歌舞伎などの多様な娯楽を通して語り継がれている。しかし、実は同時代の人びとは、それらの怪異や怨霊をしたたかに利用して、裁判や交渉を自らの有利に進めようとしていた。高谷知佳准教授が「怪異」を切り口にして見出すのは、それとは裏腹の人びとの合理性だ。

たかたに・ちか  
1980年、奈良県に生まれる。京都大学法学部卒業後、同学部助手(現在の助教)をへて、2006年から現職。著書に『「怪異」の政治社会学—室町人の思考をさぐる』(講談社選書メチエ)、編著に『日本法史から何がみえるか—法と秩序の歴史を学ぶ』(有斐閣)がある。

平安時代から江戸時代初期にかけて、奈良県の多武峰妙楽寺(現・談山神社)に祀られる藤原鎌足(現・木像「大織冠像」)が破裂するといふ怪異現象がたびたび起こった。人びとは、「凶事の前ぶれだ」と恐れ、政権は多武峰に使者を派遣し、祈りを捧げて怒りを鎮めようとした。「破裂といつても、割れて飛び散るわけではなく、少しヒビが入ること。気温や湿度の変化によって割れることもあるでしょう」。淡々と答えるのは、「怪異」を切り口に、中世の政治情勢や政治に絡む人びとの思考にせまる高谷知佳准教授。とはいえ、その原理を知っている現代の私たちでも、仏や地蔵の顔に傷がつくと、背筋に冷たいものが走る。車止めのコンクリートが欠けていても、なんの感情も抱か

ないのに、だ。科学の知識に乏しい中世の人びとなら、なおさら恐れられたのは、「もちろん恐かったはず。でも、文献をながめると、『さほど信じてないな』と思えるふしも(笑)」。それはどういうことなのだろう。

## 裁判や交渉での「怪異」

明治維新以前の日本社会では、「神仏が国家を守る」という前提のもと、政権と寺社が強く結びついた。前述の「破裂」や、寺社境内に動物が侵入して変死する、火の玉が飛ぶなどの怪異現象は、神仏がこれから社会に起こる凶事を警告しているのだと解釈され、怪異の発生を寺社が申し出ると、政権はその解決に奔走した。

政権にとっては「凶事を未然に防いだ」という社会へのアピールになり、寺社にとっては政権に近づき、自らの地位を高める手段になった。「寺社が武士と裁判をして負けそうなきや、修繕や祭礼に協力してもらえないときなどに、『怪異が起った、神仏がお怒りだ』と主張して、裁判を有利に運ぼうとすることもありました」。中世には、現代のような、全ての人に等しく適用される法や裁判制度はなく、当事者間での交渉はもちろん、法以外の慣習を利用したり、権威ある第三者に取りもつてもらったりすることもあった。「法や裁判の不十分な社会を、いかにサイバイバルするか。室町時代はとてもしびやかな時代なのです。怪異はこうした裁判や交渉で武器となりました」。

## 「怪異」の終わり

藤原鎌足像はたびたび破裂しているが、その一つひとつを調べてみると、破裂の直前に、多武峰に関わる裁判や紛争が起こっている



藤原鎌足公御神像  
別名・大織冠像。藤原(中臣)鎌足は飛鳥時代の豪族。中大兄皇子とともに蘇我氏を倒し、大化の改新後は政府の中核を担う。平安時代に栄えた藤原氏の祖(写真提供・談山神社)





『付喪神繪巻 2巻』(抜粋)

室町時代に成立した「付喪神(つくもがみ)」の話を描いたもの。「付喪神」は、捨てられたことに腹を立て、妖物に変化した古道具たちが復讐を企てるも、最後には改心し、仏門での修行をへて成仏を果たす物語(所蔵・京都大学附属図書館)

### 歴史は学べても、 歴史には学べない

破裂を報告したという。「朝廷は、使者は派遣するものの、根本的な戦乱の調停などにはいっさい取り合ってくれませんでした。このため多武峰は、『祈禱を捧げても破裂は治らなかつた』、『治つたが、数日後にまた破裂した』などと、気の毒になるくらい、何度も破裂を訴えています」。

中世の終わりとともに、多武峰だけでなくその他の寺社も、政権に対して怪異を訴えることはなくなった。その代わりに近世の政権のもとでは、裁判制度が充実していった。

高谷准教授の専門分野は法制史。特に室町時代が専門だ。法学部に入学後も、子どもの頃から惹かれてきた妖怪などの「おどろおどろしい話」や、その背景となる歴史や古典文学への興味はずっと続いていた。その関心と法学部との交点を探る中で、この分野に出会った。法制史は法の成立や運用などの歴史を研究する学問。西洋の近代的な法や裁判の制度が導入された明治時代以降の研究が最も多く、前近代では『御成敗式目』の作ら

れた鎌倉時代や、『公事方御定書』の編纂された江戸時代の研究がさかんだった。「成文法や明確な裁判制度がほとんどみられない室町時代の研究は少なかつたので、どのように秩序が形成されていったのか、明らかにするべきことはまだまだたくさんあります」。

研究の道に進んでからは法制史の先生に師事しながら、文学部の日本史研究室にも足を運んだ。「門前の小僧習わぬ経を読む」といいますが、本堂にまで入れてもらって勉強させてもらいました(笑)。京都大学の学問の環境のおかげでここまでできました」。

現代の法やモラルに、伝統や歴史はさまざまな影響を与えている。特に京都では、「伝統を守る」ということが重視される。しかし一方で、個別の「伝統」や「由緒」を遡るだけ遡ってみると、実は江戸時代に、同じような立場や集団の争いの中で、一歩抜きんでるた

めに生み出されたものであることが多い。例えば、戦国武将の鎧や刀をめぐる由緒などは、戦国時代ではなく、江戸時代の相統争いの中で主張されるようになったものも多くある。そして、政権に対して訴える理由のなくなった神仏の霊験や怪異も、その由緒の中に織りこまれていった。

法制史を学ぶのは、過去の事例を今に活かすためではなく、法や規範、伝統やモラルが生まれた過程をきちんと知るため。「歴史を学ぶことはできて、歴史に学んで現在の問題を解決することはできません。過去の人びとは、自らの直面する問題を解決するために、怨霊の執念を利用し、さまざまな知恵を駆使して、現代の視点で見ると非合理的な(怪異を主張したり、想像に満ちた(由緒)を作り出したりしました。歴史はそうした思考と決断の積み重ねです。それと同じように、現在の問題は、現在のわれわれの手持ちのカードで取り組まなければならない。将来、法を運用する側に立つかもしれない法学部の学生たちには、これだけは覚えていてほしいのです」。

#### \* 応仁の乱

有力な大名であった細川勝元と山名持豊の対立と、将軍・足利義政の後継争いが原因で起こった内乱。一四六七年から十一年間続いた。

ことが多い。そして、政権から派遣された使者が、破裂した鎌足像に向かつて祈りを捧げると、割れた部分が治つたとされている。木像が割れることはありえても、治ることはまずない。このことは、鎌足像を最も間近で見ている多武峰こそが、実態と異なることを知りながら、自らの利益のために怪異を利用していたことを示している。

しかし、世の中が戦国時代に移行する時期になると、怪異は政権を動かすことができなくなる。多武峰は、応仁の乱以降、たびたび戦乱にまきこまれ、朝廷や室町幕府に介入してもらおうと、何度も



研究は、関連する日記などの古い記録を読むことから始まる。応仁の乱の後の京都では火事が頻発し、室町時代の多くの書類が燃えてしまったという。「それに筆まめな人がいたかどうか重要」



# 100年後の人類に役立つ 可能性を秘めた、 龐大な標本を次世代へ



にしかわ・かんと  
1975年、福岡県に生まれる。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程中退。同研究科助手、助教をへて、2015年から現職。2018年から大学院地球環境学堂准教授を兼任。

**西川完途** (地球環境学堂／人間・環境学研究科 准教授)

生物図鑑に載っているヤモリ、カエルをはじめとする爬虫両生類。生態や習性の詳細が載ってはいるが、一つひとつの種に目を向けると、実はわかっていることはほんのわずか。「フィールドに出てみると、図鑑の情報とは違う時期に卵を産んでいたり、これまで同種と思われていたものが実は違う種だったり、いろいろな新情報に遭遇します」。3年前に研究室の先代・松井正文名誉教授から龐大な数の標本を継承した西川完途准教授。次の世代にバトンを渡す重責を感じつつも、フィールドワークに喜々として取り組む。

「さあ、どうぞ」。地下標本室の電灯が点いた途端、棚にずらりと並ぶ爬虫両生類の標本にくぎづけに。標本の総数は六万五〇〇〇点。一見すると雑然と標本瓶が置かれていたようにだが、一つひとつが「目・科・属」〈採集場所〉〈採集日〉に分けてラベリングされ、〈あるべき場所〉に整理されている。「あまり知られていませんが、爬虫両生類の系統分類学において、京都大学は日本一の研究実績を誇ります。その裏付けとなるのは先代の松井正文先生から四〇年以上続く研究室の歴史と、アジアでも有数の標本の数です」。

## 標本を根拠に、 より妥当な分類体系を構築

龐大な数の標本を集める目的は、

爬虫両生類の種を分類・整理することにある。日本に棲むカエルなどの爬虫両生類の多くは、実はまだ名前が付けられていない種を含む。一方で、過去の研究者がそれぞれ異なる名前をつけたことで、同種に二つの名前がついてしまっていることも。「私の研究は『野外にいる生物を見つけ、その種を分類したり、新たに名前をつけたりして、爬虫両生類の種を体系的にまとめる』ことです。一言でいえば簡単ですが、成長した姿のカエルでも見分けるのは難しいし、卵の状態だとなおさら。爬虫両生類の分類や種の名前は、研究者によっても意見が異なります」。そこで、標本を細かく観察したり、種のDNAを調べたりするなど、あらゆる角度から観察することで、〈これ〉と〈あれ〉とは違う、あるいは同じであることを証明しなければならぬ。その証拠資料として標本が必



標本を保存し続けるには、研究室の労力と維持費が不可欠。例えば、標本の腐敗を防ぐアルコールは経年劣化するため、定期的の一つひとつの状態を点検しつつ、必要があれば液を入れ替えなければならない

要となる。「同種であっても、保存の対象となります。〈その時〉に、〈その場所〉で、〈その生物〉が生きていたことは標本でしか証明できません」。

## 標本を半永久的に 残すことの意味

「標本を保存する」という考えは、ヨーロッパ諸国に深く浸透している。日本固有の爬虫両生類の古い標本の多くは、オランダ、イギリス、ドイツなど、ヨーロッパ諸国の博物館に保存されている。江戸時代に来日したヨーロッパ人の学者たちは、さまざまな生きものを標本にして母国に持ち帰り、次世代の研究のために保存し続けたという。日本の固有種の古い標本を観察するために、海外の博物館を訪問することも西川准教授の研究の一環だ。「系統分類学の研究は、短期的には成果を出しにくい分野ですが、

全ての生物学分野の基礎となる研究であり、将来には（何かの役に立つ可能性）も秘めています。例えば、『パイオミミクリー』という生物のかたちを模倣して、工業製品を創造する学問がありますが、古い標本からイノベーションが生じた例もあります。各地の博物館を訪ねるたびに、『標本を残し続けること』の重要性を再確認します。

## サンショウウオとの、偶然で必然の出会い

二万種におよぶといわれる爬虫両生類の中で、小型サンショウウオを専門とする西川准教授。研究対象に決めたきっかけは、溪流に入って魚釣りをしたときのこと。

「上流から、ヒダサンショウウオの卵が流れてきたのです。光に反射して虹色に輝く、その美しさに感動しました。後でわかったのですが、私のいた溪流は偶然にもサンショウウオの卵を見つけやすい地形だったのです」。

溪流魚とサンショウウオは生息地が近く、いずれも上流に棲む。しかし、イワナやヤマメなどの溪流魚は「魚止めの滝」といわれる落差の高い滝があると、それを越えて越えない。サンショウウオはその滝を越えた場所で、外敵に食べられないように水中に卵を産みつける。「棲み分けが成り立っていて『おもしろい!』と思ったのです。卵との遭遇でサンショウウオの生態に興



上/2017年、近畿地方のとある川で調査中に、巨大なオオサンショウウオと遭遇。平均的な体長は1m未満だが、この個体は1.2m  
下/2015年、学生たちにフィールドワークを体験してもらうボルネオスタディツアーにて。体長3.5mのニシキヘビと記念撮影



味がわき、すぐに虜になりました。大学入学当初、将来は教師か会社員になると思っていたが、気がつけば研究者しか考えられなかった。

## フィールドワークと研究室とがつながる瞬間

標本は維持するだけでなく、増やすことも大事。新たな標本を収集するために、自らの足で海外を飛びまわる。おもな研究フィールドは、両生類が多く生息する東アジア、東南アジアの国々に。調査は長いものだと二か月間にもおよぶ。「大きな土地で目的の生物を見つけるには、事前の情報収集は欠かせません。昔のヨーロッパの探検隊が残した旅行記録には『○○はボルネオの○○川の最上流部で採れた』としか書かれていないことがありますが。その情報をたよりに現地に入り込み、地元の人たちに聞き込みをして、目標の種にせまる。こういう文化人類学的手法を用いることもフィールドワークの魅力です」。

研究の成果となる〈発見〉は、フィールドワークがベースとなる。しかし、〈予想外の発見〉は、日本に帰った後に研究室で気づくことが多いという。「密林の奥地で、ドラマチックな宝箱を見つけるような発見を想像されるかもしれませんが、意外と研究室でほんやりと標本を見ているときに『あれとこ

れとは違う』とわかることがほとんどです。一〇年前に採った標本でも『はっ!』と気づくこともありました。点と点とが線になる瞬間は、たまらなく興奮します」。

## 標本維持に差し迫った危機

先代の松井正文名誉教授から、全ての標本を受け継いで三年。その数は今後も増え続け、蓄積される見込みだ。

この膨大な資料を維持するには、相應のスペースと専門知識を備えた人材が不可欠。今は地下標本庫に収蔵している標本を一五名の大学院生らと管理しているが、キャパシティは限界を迎えつつある。

「ここまで多くの標本を保存するところは、世界でも珍しい。いわば日本の財産です。本来は設備の整った大きな施設で、専門の学芸員が管理することが望ましいのです。社会に結びつく成果がすぐには出ないので、みなさんの理解を得にくいのですが、いつ・どこで・何に役に立つかはわかりません」。

## 研究で得た見識を社会に還元

生物研究のおもしろさをたくさんの人たちに伝えたいという思いから、小学校の出張授業に向いてオオサンショウウオの生態を解説したり、フィールドワークの心掛けを指導するエコツアーを開催

したりするなど、課外活動にも積極的に取り組む。種の保全活動もその一環だ。

保全対象種の一例は、国の特別天然記念物に指定されているオオサンショウウオ。「京都市の鴨川沿いのそのそと歩く姿は、動画共有サイトで人気を集めています。動画に映っている京都のオオサンショウウオのほとんどは、中国から来た個体との交雑個体。全てを捕獲するには限界があるけれど、交雑の拡がりを防ぐために対策を練っています。この活動も、何百年も先の未来に、固有種を残すことにつながるはずですから」。

\*パイオミミクリー  
生物の機能を模倣することで、新しい技術を生み出す学問。爬虫両生類の生物の中で、ヤモリの「ファンデルワール力を用いて壁に貼り付く」足の裏をヒントに、何度も貼り直せる粘着テープが開発された例がある。



2017年に創刊された専門誌『Caudata(カウダータ)』の編集にも携わる。アマチュア、プロを問わず爬虫両生類をこよなく愛する研究者たちの記事が満載。ネット通販のサイトで販売されている

# スピリット

下級生が中心となるBチームの応援にて。関西Bリーグは、トップ層だけでなくチーム全体の強化を目的に、KULが他大学によびかけて創設した

## きっかけ、国籍、年齢は関係ない。踊りの輪はどこまでも広がる

民族舞踊研究会 部長  
鳥居祐人  
(工学部3回生)



部員がお世話になった人や友人を招待して開く、招待パーティで踊ったマケドニアの踊り

後悔しつつ飛行機に乗りましたが、現地に着いた途端に吹き飛びました。京都大学からは8名が参加し、台湾と香港のフォークダンスチームとともにハンガリーの踊りを披露した。忘れられないのはその後に参加した酒場でのパーティ。地元の人に混じってお酒を飲み、いい気分になったところで演奏隊の出番。すると、曲に合わせてお客みんなと一緒に踊り出す。「現地の独特の雰囲気や生演奏ならではの臨場感、日本では味わえない。今でも体が覚えています」。

鳥居さんがこの研究会を知ったのは新入生の頃。新歓でにぎわうキャンパスで「うちに来てくれたら、ご飯おごるよ」と、決まり文句で誘われた。「おごってくれるなら」と軽い気持ちでついて行った先で見た踊りに興味を持った。「飽き性で、新しいゲームを買ってもクリアする前にやめてしまうくらいです。そんな私がこの3年間は踊りっぱなし。(笑)新しい踊りをもっと知りたいという興味は尽きそうにありません」。

先輩の一声から踊りの輪に加わり、その輪は海外にまで広がった。「経験や、国籍、年齢も違う人がごっちゃになって一緒に踊る。それが楽しいのです。卒業しても仲間とは踊りでつながりたい」。今度は鳥居さんがその輪を後輩へと広げる番だ。

**朝** 8時から気温30度超えの猛暑の中、ゴール裏まで回り込み、縦横無尽にフィールドを駆ける部員たち。スティックから放たれるシュートは時速160キロメートル。「地上最速の格闘球技」の名はだてではない。予定の練習メニューが終わっても、なかなかフィールドを離れようとする主将の椎橋広貴さん。「主将は誰よりもラクロスに夢中ですからね」と、チーム運営を担う後輩の佐藤瑠奈さんは笑いながら椎橋さんの姿を追う。

1990年創部の京都大学男子ラクロス部(以下、KUL)は、関西学生ラクロスリーグ戦\*に第1回から参加。優勝7回・準優勝3回を誇る強豪だ。椎橋さんに入部を決意させたのは、「きみたちを絶対に公式戦に出場させる」という先輩のことばだった。「『京大から学生日本一』という文句に惹かれて新歓に行きました。『何かを成し遂げたい』という思いがあったんです」。実はその時期、KULは2年間の公式戦出場停止中だった。「復活を誓って社会人チーム『ファルコンズ』との試合に奮

## 成し遂げたい。「学生日本一」という感動

男子ラクロス部 主将  
椎橋広貴  
(工学部4回生)



闘する先輩の姿に、胸が熱くなりました」。ラクロスの特徴は、攻守のポジションごとの役割や求められる技量が多岐に渡るところ。野球経験者は的確な送球、サッカーは相手をかかわす俊敏性とフィールド感覚、剣道の集中力、卓球のフットワーク、それぞれの経験を活かせる活躍の場がある。高校球児だった椎橋さんは、自身を「器用貧乏なタイプ」と評する。「1、2回生の頃は無鉄砲な練習に結果が伴わず悩みました。3回生になって、『どうすれば』と自問しながら試行錯誤を重ねる中で、少しずつ力がつきました。分析力は誰にも負けません」。

「まとめる」よりも「ひっぱり」タイプ。「どうすれば」を言語化して伝え、100人を超える部員のスキルアップを後押しする。「なんとなく決まったシュートと、分析に基づくシュートとは、その後の成長はずいぶん違います。公式戦復帰3年目の昨シーズン、惜しくも準優勝に甘んじた。今シーズンは「学生日本一」への明確な道筋を立てて練習に励む」。

KULの強みは戦術。「手数が多さを活かして意表を突く攻撃ができるのは、私たちならではの。先輩たちが積み上げた数かずの『型』を戦術に活かして、勝ちを重ねています」。たしかに手ごたえで「学生日本一」を狙う。「ラクロスはマイナーなスポーツですが、京大でもラクロス界でも注目されるチームになりたいんです。KULの理念は『自己の研鑽 感動の創造』。本気で日本一をめざす一途な姿こそが、応援して下さるみなさんへの感謝の体現だと信じています」。インタビューを終えると、待ちきれない様子で、午後の作戦会議へと足早に駆けていった。

\*関西学生ラクロスリーグ戦 ●京都府、大阪府、滋賀県、兵庫県、加盟大学22校の男子ラクロス部が戦う公式戦(日本ラクロス協会主催)。優勝校はラクロス全日本大学選手権大会に準決勝から出場できる。



新入部員のほとんどがラクロス初心者。「努力の分だけうまくなる。活躍する選手はみんなラクロスに没頭しています」



インスタレーションは、場所や空間も含めて、作品として体験させる芸術。映っているのはクビトという神を描いた作品「触れたら、死ぬ」

NGO法人をベナンの友人とともに立ちあげた。社会的・経済的に不利な立場にいる少女たちに職業訓練を無料で実施している



**鮮**やかなピンクの衣装に身を包み、リズムをとりながら体を揺らす女性たちが画面に映しだされる。蛇の神が憑依し、神となり踊る女性たちの輪に、人びとは足を踏み入れてはいけない。ところが、一人の青年が輪に加わり、踊り始めた。——村津蘭さんが監督をつとめるドキュメンタリー映画『トホス toxsosu』のワン・シーンだ。「輪に入った男性は、日本でいうと知的障害者にあたるような人で、村人からかわれる姿をたびたび目にしていました。でも、儀式では、神である女性たちに敬われている。彼はどのような存在なのだろうか」と。

村津さんの研究フィールドは、西アフリカのベナン共和国。『トホス』で描かれたヴォドゥンをはじめ、在来宗教の信仰が人びとの間に根づくこの国で、民族の暮らしやあり方を調査する。

学部生時代にはユーラシア大陸を横断するなど、他文化への好奇心は途切れなかったという村津さん。日本企業で働いた後、7年前に青年海外協力隊として派遣されたのがベナンだった。「文化が違うと想像力のかたちも変わります。ベナンの人びとのゆたかな想像力と向きあいたくなりました。日常生活のすみずみまで宗教が浸透しているベナンをもっと知りたくて、研究者の道を選びました」。

人類学研究の基礎は、民族の生活様式や習慣などを詳しく観察し、文字で記



## 遠い国の〈現実〉をよびおこす映像作品の力

村津 蘭  
(アジア・アフリカ地域研究研究科 博士一貫課程5回生)

録する「民族誌」。「映像は、民族誌の新しい形です。ビデオカメラを片手に話を聞き、村の姿を記録します」。調査を重ねるうち、ヴォドゥン信仰の神トホスは人間の姿で生まれることがあること、特に身体や知的な障害を持って生まれた子どもがトホス神とされることがわかってきた。監督作の『トホス』は、「東京ドキュメンタリー映画祭2018\*」で奨励賞を受賞。信仰とともに生きる人びとの姿と、村の空気を伝えている。

「現地の人びとの現実に鑑賞者が入りこめる作品を生み出したい」。村津さんは、「民族誌」の範囲を拡張させ、現地の方と合作した小説や、インスタレーション展示など、多様な手法で「現実」の表現を試みている。「現実とは、環境や周囲のものから受け取る感覚を起点に、私たちのまわりに立ち上がってくるもの。現地の人びとの生きる実感が作品を通して〈伝染〉する媒体を作りたい」。

ベナンに滞在中の村津さんにIP電話で取材した。通信状況が悪く、映像は届かなかったが、「人類学でできることを追究したい」という声は今も耳に残る。レンズ越しにベナンの人びとを見つめるまなざしを想起させるに十分な強さを秘めていた。

\*東京ドキュメンタリー映画祭 ●より多様なドキュメンタリーの製作、発表の場の確保をめざし、2018年に始まった映画祭。120本を超える公募作品の中から選ばれた数十本を一挙に上映。



滞在先の家族のお母さんと。渡航は年に1、2回。「言語を覚え、食事をともにし、人びとと同じ生活をしてはじめて、心を開いてくれます」



**「伴**奏がないと難しいな」。恥ずかしそうにはにかむ顔がきりりと引き締まり、軽やかなステップで踊り始めた。靴底で床を鳴らし、ブーツのシャフトを手でたたくと、太く鋭い音が空気を震わせる。ハンガリーの踊りを披露してくれた鳥居祐さんは、4、50名の部員が集う民族舞踊研究会の部長を務める。

みんなで集まって踊る例会もあるが、普段は部員それぞれが踊りたい曲を選び独学で習得する。教材はYouTubeや資料ビデオ。ステップの順序や踊りの雰囲気を観察し、鏡の前で再現するという地道な練習の日々。毎年数回、海外から指導者を招いて開く講習会は貴重な時間。映像に残して何度も見返す。

踊りの好みは人それぞれ。激しくアクロバティックな踊りをマスターしてかっこよく見せたい人もいれば、穏やかな曲でゆったりと踊りたい人も。他大学の学生と踊る機会も多い。「出会いの数だけ新しい踊りと出会えます。みんなで手をつないで踊る曲は、人数が多いほど盛り上がります。隣の人の呼吸のリズムや体の動きを感じ取り、自分の動きとマッチする瞬間が気持ちいい」。

2回生の夏、「ハンガリーに行って踊りを披露しないか」と先輩に誘われた。「はい!」と二つ返事したものの、テスト週間にかぶっていた。「あとさき考えずに『やってしまった』と

## もの言わぬモノが語りだす 「秘めたる美学」の物語

吉田キャンパスの本部構内は、1897年の京都帝国大学の創立以降、120余年の歳月を積み重ねてきた。学徒動員、大学紛争、国立大学の法人化など、大学を巡るさまざまなドラマの舞台となったキャンパスには、その歴史を刻む石碑や功労者の胸像、遺構などが点在する。日常の風景に同化し、顧みられることは少ないが、その由緒を探れば、京大生たちの学生生活が鮮やかに蘇る。

監修：山村亜希（人間・環境学研究所 教授）



旧土工学教室本館の周辺には、18基の石碑が残る。土や木に埋もれたり、記念樹と石碑が分離されたり、一見するとなんのための石碑かわからないものも多い



### 京都大学の「顔」の変遷

正門から構内に足を踏み入ると、まず飛び込んでくるのがクスノキと時計台。A木陰での談笑や、待ち合わせ、課外活動に励む学生たちの姿は、京都大学の（いつもの光景）だ。このクスノキ周辺に植樹や銅像の設置がなされたのは80年ほど前のこと。それまでは、往来する学生たちを総長の銅像が見守ったかつての図書館前の空間Bも、〈京大の顔〉だった。図書館が火災で全焼したので、胸像は時計台周辺に移設されたが、戦時下の金属類回収令で胸像を供出。鑄造用の原型が保存されていたものが戦後に再建された。



現在のクスノキは1935年に植えられた2代目。初代が植えられたのは1912~1925年の間と推測される

### 学部・学科への アイデンティティが作り出した景観

旧土工学教室本館C周辺は、記念植樹と植樹年などを記した石碑が密集するエリア。土工学教室本館が建設（1917年）された大正時代末期から昭和初期に設置されたものが多い。石碑の記載から、学生が毎年のように、卒業時に校舎周辺に植樹を繰り返したことがわかる。木々はみごとに成長し、校舎を彩る緑の景観を作り出している。

文学部東館の中庭には、同窓会の寄付で設置された噴水とポンプの遺構がある。D地面には白いコンクリートが敷きつめられ、イスラム建築の人工的な中庭空間を連想させる趣があった。このように、校舎自体は大学が建設するが、校舎周囲の植樹や中庭の整備は、卒業生や同窓会が担っていた。

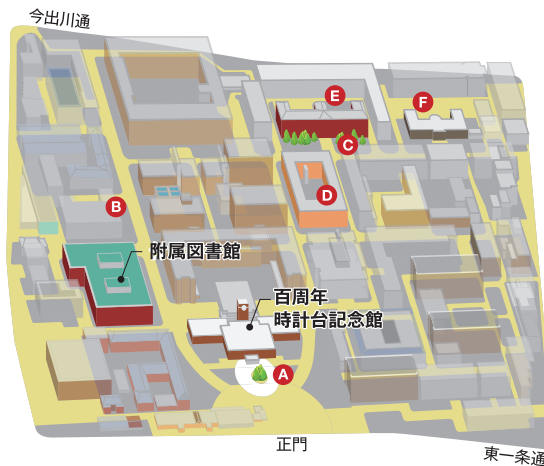


1939（昭和14）年の本部構内再現模型  
かつての図書館前は、植え込みや樹木などの緑で彩られていた



京都帝国大学図書館前に設置された故木下総長銅像（所蔵：京都大学文書館）

木下廣次 胸像 ● 京都帝国大学初代総長。「大学生は『自重自敬』を重んじ、『自立独立』をめざさねばならない」と述べ、京大の「自由の学風」の礎を築いた



同じ階段でも〈思想〉が違う？！

### 学問の思想を伝える「純粹階段」

どこにも繋がっていないコンクリート製の階段がある。F説明板には「京大建築純粹階段」の文字。「純粹階段」とは、前衛芸術家の赤瀬川原平たちが提唱した「トマソン」という概念の一つ。建造物の増改築や更新を繰り返す中で機能を失い、まるでオブジェのように取り残された階段をそう呼ぶ。かつては研究室のアトリエにつながる階段だったが、アトリエは1984年に解体・撤去された。

山村 ● 土工学教室の審判台も一種の「トマソン」といえますが、そこに説明板はありません。この物体に命名し、評価・説明を加えるところに、建築学教室の学問的思想がうかがえます。



純粹階段



かつての意匠設計研究室アトリエ ● 右下の階段だけが「純粹階段」として現存する

山村亜希教授  
のひとこと

京大生は、勉学・研究のみならず、課外活動や友人との交流などを通して、10代から20代の多感な時期の多くを本部構内で過ごします。「青春」を過ごした場所への強い思いと誇り、アイデンティティが、卒業後の寄付や記念植樹につながるのではないのでしょうか。100年以上の歴史を持つ京大ならではの景観といえます。



1960年頃、文学部東館の中庭に集う教官や学生たち（所蔵：京都大学文書館）

現在（右）は、ポンプは左下の四角いふたの下にある。管には「エバラポンプ」というラベルがついている



### 自分たちの場所は 自分たちで彩る

旧土工学教室本館の裏Eに残る、コンクリート製のテニスの審判台跡。在校生たちの要望に応じて、卒業生からの寄付金で1920年にテニスコートが造成された。近年、コートは駐車場に変わり、審判台だけが残された。かたわらには整備用の大型ローラーも残る。

山村 ● かつて大学で主流であった（口の字型）の校舎の中央には、テニスコートや噴水、中庭など、学生・教員の憩いの場が作られました。校舎とその敷地内は「学部学科のもの」というテリトリー意識がうかがえます。ちなみに、卒業生・同窓生による石碑や植樹は文系学部よりも理系学部圧倒的に多く、理系学部の学科・研究室の紐帯の強さを物語ります。



審判台跡（左）とローラー（右奥）

アンケートに  
答えると  
「総長カレー」が  
当たる!



アンケート

問1	本誌の入手場所
問2	関心をもった記事
問3	ご意見・ご感想
問4	年齢・職業(学年)
問5	プレゼントに応募の場合 氏名・住所

スマートフォン、タブレットPC、パソコンで下記のQRコードを読み取り(もしくはURLを入力し)、専用フォームにアクセスするか、本誌裏表紙の奥付に記載の発行所宛に、郵送、FAXまたはメールで、上記項目について記入してお送りください。ご協力いただいた方の中から、抽選で10名様に「総長カレー」をプレゼントします。応募の締め切りは2020年3月11日(水)です。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

URL <http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kurenai/enquete>



## 京都大学基金事務局より

京都大学基金では、卒業生をはじめ保護者や地域、企業・団体の皆様からいただいたご寄付を、教育・研究・社会貢献のために活用しています。

【お問い合わせ先】 京都大学基金事務局 TEL 075-753-2210

ききんの  
基本  
vol.06

### 「125」 何の数字かご存知ですか?



2022年6月18日、京都大学は創立125周年を迎えます。本学では125周年を新たな契機とすべく、記念事業を実施し、世界をリードする研究の推進と、次世代を担う人材育成に取り組んでいく予定です。

創立125周年のちょうど3年前となる2019年6月18日には、創立125周年記念事業特設サイトを公開し、本学のあゆみとともに、特徴ある学問分野や多方面で活躍する同窓生の姿を紹介しています。

この125周年の一環として、京都大学基金サイトのリニューアルを行いました。京都大学基金では、人材育成を中心とする創立125周年記念事業への取り

組みや、未来に向けて「京大力」を磨き続けるための運用原資とすべく、募金活動を実施しています。本サイトにおいて、募金活動の状況や基金の活用報告、寄付者や支援を受けた学生の声など、さまざまな情報を発信していく予定です。

これから3年間、両サイトにて創立125周年を盛り上げていきます。



京都大学基金サイト

創立125周年記念事業特設サイト

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/>

<https://125th.kyoto-u.ac.jp/>

### 編集後記

東京オリンピックの開催まで1年を切り、日本開催のラグビーW杯が盛り上がりを見せ、日本中でスポーツの秋を感じられる今日この頃かと思えます。ここ京都大学でも日々スポーツにいそんでいる学生も多く、今号で取材した男子ラクロス部は、私学全盛と言われる現代にあって、昨年は学生日本一を勝ち取るあと一歩のところまで迫りました。

アメリカでは、大学スポーツが非常に盛んで、リオ五輪(2016)の金メダリストにおける世界の大学ランキングでは、スタンフォード大学やUCLAなどアメリカの大学が世界の上位を占めたと聞きます。

最近は大出陣者の中でも、日本でそして世界で活躍するスポーツ選手も見受けられるようになってきており、男子20キロ競歩では京大出身の山西利和選手が、東京五輪出場を勝ち取りました。これはリオ五輪の七人制ラグビーに出場した竹内亜弥さんに続く快挙です。今後も多くの京大出身スポーツ選手が世界で活躍することを願ってやみません。

2019年10月  
広報委員会「紅萌」編集専門部会

## 京都大学同窓会だより

### 第14回京都大学ホームカミングデイの開催

2019年11月2日(土)に「挑」をテーマに第14回ホームカミングデイを開催します。ホームカミングデイは本学同窓生やそのご家族、一般の方との交流を目的として実施しています。各イベントを通して、皆さまが今向き合っている夢や、こころの底に抱いている夢に対して、心新たに「挑む」一歩の後押しになればと思います。

当日は、建築家の安藤忠雄氏の講演と山極壽一総長との対談が予定されています。たん熊北店の特別弁当を味わう昼食会や、アカデミー(学問)とアート(芸術)の融合がテーマの在学学生及び卒業生の発表会、重要文化財・清風荘の見学、百周年時計台記念館前庭での屋

台・ステージ企画、クイズ研究会やけん玉クラブ等所属の在学学生に挑戦するイベント、謎解きスタンブラリー等、多彩なプログラムを用意しています。

ご家族・懐かしいご友人とお誘い合わせの上、ぜひご参加ください。イベントの詳細は京都大学同窓会ホームページからご覧いただけます。

(<http://hp.alumni.kyoto-u.ac.jp/>)



建築家 安藤忠雄氏

### 新たに入会された同窓会

2019年3月に「京友会(静岡県京都大学同窓会)」と「京都大学ユースホステルクラブOB会」が、5月に「京都大学同窓会ヘルスケアネットワーク令和」があらたに京都大学同窓会に入会されました。

「京友会」は、静岡県に關係する京都大学関係者の親睦を目的に、1987年に設立された歴史ある同窓会です。「京都大学ユースホステルクラブOB会」は、創部58年になるキャンプ・旅行を主体としたクラブで、加入者数は約750人です。「京都大学同窓会ヘルスケアネットワーク令和」は、出身学部や現在の職業を問わず、ヘルスケアに関心のある同窓生が幅広く交流できる場として新たな時代の幕開けとともにスタートしました。

### 京都大学同窓生向けサービス

在学生と卒業生、教職員の方を対象に「同窓生向けサービス」を運用しています。ご登録いただいた皆様に同窓生限定の優待特典や母校の最新情報をお届けするほか、ご希望の方は登録者同士の交流も可能です。京都大学ドメインのメールアドレスを利用できるサービスも2019年リリース予定です。ぜひご登録ください。( [http://hp.alumni.kyoto-u.ac.jp/kuon\\_alumni/](http://hp.alumni.kyoto-u.ac.jp/kuon_alumni/) )

京都大学同窓生向けサービス  
KUON 京大アラムナイ  
KYOTO UNIVERSITY ALUMNI NETWORK



執筆者のコメント

冬は苦しい季節だと思います。寒いので。けれどその分、人との時間が際立つ季節だとも感じます。誰もが誰かと繋がっていると信じられる瞬間があるなら、苦しさにもお釣りが来る。冬は嫌いじゃないです。寒いけど。

\*青羽さんは、2ページ「巻頭対談」にも登場しています。

執筆者  
青羽悠さん  
(総合人間学部二回生)

その手を握り、光へ連れ出す。寒空の中、右手だけが暖かかった。二枚のチケットを掲げ、隣の顔を覗き込む。彼は、彼女は、君は、あなたは、  
——知り得ない。その表情は二人のものだ。寒い冬はまだ続く。せめて今は、光の中で。

ことば

触発ギャラリー

## いろ+おと+ことば

主役は表現・創作活動に励む学生たち。一つの作品を起点に、「いろ・おと・ことば」のバトンをつなぎます。感化され、刺激され、ときには反発をしながら、生み出された作品のコラボレーションをお楽しみください

\*紅萌ホームページでは、3つの作品を融合した映像作品を公開しています。

起点

今回は「おと」からスタート

撮影者  
大槻真子さん  
(医学部3回生)

いろ



オレンジ色の街灯に照らされた夜の街。石畳に石造りの建物が立ち並ぶ通りは、帽子を被りステッキを持った紳士やエレガントなドレスを着た女性でにぎわい、バブで人びとが談笑している。曲を聞いてそんな情景が浮かびました。夜闇と光がコントラストをなす写真を、と思い、このドイツのクリスマスマーケットで撮ったメリーゴーランドの写真を選びました。

撮影者のコメント

おと

## Take The "A" Train

演奏者  
ダーク・ブルー・ニューサウンズ・オーケストラ  
作曲 ビリー・ストレイホーン



「Take The "A" Train」、これは言わずと知れたデューク・エリントン楽団の名曲中の名曲で、恐らく誰も一度は耳にしたことがあるでしょう。ジャズの醍醐味でもあるソリスト、キャッチーなメロディ、まさにこの曲はジャズ初心者にとっても、とても親しみやすい曲だといえます。

演奏者のコメント



京都大学広報誌 紅萌 第36号  
2019(令和元)年10月25日発行

編集●京都大学広報委員会 「紅萌」編集専門部会  
発行●京都大学 総務部 広報課  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
TEL 075-753-2071 FAX 075-753-2094  
URL <http://www.kyoto-u.ac.jp/>  
E-mail [kurenai@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp](mailto:kurenai@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp)  
制作協力●京都通信社 デザイン●中曽根デザイン

「紅萌」は、次のURLで閲覧できます。  
WEB版 <http://www.kyoto-u.ac.jp/kurenai/>  
PDF版 <http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kurenai/>

©2019 京都大学 (本誌記事の無断転載・放送を禁じます)

「紅萌」ウェブサイトも公開中

動画コンテンツなど、冊子では紹介しきれなかった「京大の魅力」を発信します。下記のアドレスからアクセスしてください。



<http://www.kyoto-u.ac.jp/kurenai/>